
ゲーム

神藤聡

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
ゲーム

【コード】
N4348B

【作者名】
神藤聡

【あらすじ】
恋と友情の境目のお話。主人公を取り巻く恋人と男友達との人間関係について描きます。

負け犬

タクシーは県道十二号線を西に向かって走っていた。

私は後部座席でぼんやりと窓の外を見ながら、ときどき勝手に出てくる涙をぬぐった。タクシーの後部座席で涙をぬぐう若い女。韓流ドラマでこんなシーンがきつとどこかにあるんじゃないかと私は思った。とはいえ、実際に韓流ドラマをきちんと見たことはない。

運転手は、私が泣いているのを知ってか知らずかときどき話しかけてきて、私は仕方ないので平静を装いつつ適当に相槌を打った。ときどき、バックミラー越しに運転手の視線を感じたが、私は頑なに窓の外を見続けた。絶対にしゃくりあげたりしなかつたし、涙をぬぐうのも、疲れた目をこするみたいに目頭を押さえる程度にした。薄暗い車内で、それがどの程度効果があるのかはわからなかったが見ず知らずの韓流ドライバーに泣き言を吐くことだけはしなくなかった。そうすれば余計に惨めな気持ちになることを知っていたのだ。本当はどちらかというと放っておいて欲しかったし、そうしてくれればほんの十五分程度の道のりをやり過ごすことくらい簡単だった。しかし私はどちらかというと八方美人の性分で、残念ながらこの人の良さそうな白髪のおじいさんを完全に無視する度胸すら持ち合わせていなかった。

もしかしたら私がただ普通にしていれば、そう話しかけられることもなかったのかもしれない。しかし声を出せば濡れているし、眉間にしわを寄せるのをやめることもできない。何しろ涙は勝手に出てくるのだ。泣くのをやめられないことがなおさら悔しかった。

彼は今年はずいぶん寒いとか、イチローがメジャーリーグでがんばってることとか、どちらかというところでもいいことばかり話し

た。私はすでに彼がわざとそうしていることに気づいていた。車内にはなんともいえない空気が満ちている。

「今年の冬は寒いって言ってたからねえ」

そう言つと運転手はちらりと横目でバックミラーを見た。

「おじょうちゃんも風邪には気をつけたほうがいいよ。オレの友達、風邪引いたーつって死んじゃったよ。まあ歳が歳だったから、おじょうちゃんは死ぬこたあないだろうけど、あれは甘く見ちゃあダメだねえ。ダメだダメだ」

彼は気を使ってくれているのだろう。私は、余計なお世話だと思つた。しかしおせっかいだからと言つて彼を非難しなければならぬいほど、被害者ぶるつもりもない。

被害者、と私は思った。自分が被害者であるとは、少しも思いたくは無かつた。その言葉は自分を惨めにするだけのような気がしたのだ。自業自得だと思つているほうがまだマシだ。

しかし運転手にしてみればそんなふうに見えるんだろう。別れ際、ドア越しに手を振つた英一の申し訳なさそうな顔。この白髪のパイパーは、英一から受け取つた大きな荷物を、愛車のトランクに運び入れてくれた。状況から事情はすぐに察知できただろう。

涙はまだ止まりそうになかつた。

窓の外はだいぶ暗くなつていて、どの車もヘッドライトを煌々と照らしながら反対車線を通り過ぎていった。あと十分もすれば、二週間ぶりの自宅に到着する。片側二車線の左車線は路駐車が点々と道をふさいでいて、車線は一つしかないのと同じだった。それでも渋滞と言つほど混むのでもなく、空いているというほどでもなく、この3kmの道のりにちょうど十分くらいはかかるだろう。この通

りは信号が多い。

私は、早く家に着けばいいのに、と思った。その十分は、途方もなく長く感じた。

英一と付き合い始めたのは、ちょうど1年くらい前のことだ。職場で知り合って、お互いそれぞれに彼氏（彼女）の存在があったが、先に英一がその彼女と別れた。そのあと私は当時の彼氏と別れることを決意した。どちらにしても、私と、その当時の彼氏とは、決してうまくいっておらず、いずれ別れるつもりでいたのだ。英一はきっかけを作ったに過ぎない。よくある話だ。

付き合って半年くらいから、私と英一はほとんど同棲に近い生活をするようになった。私が自分の部屋に帰るのは、服を取りに来るとか掃除をするとか、用があるときだけになっていた。私は英一のために毎日食事を作ったり、英一の部屋を定期的に掃除したりした。別に頼まれたわけじゃない。英一が仕事で遅くなることが多かったので、暇な時間を持って余していただけなのだ。

しばらくは、英一がそういう私に満足しているように見えた。私にとっても、それはとても「まっとう」な関係に思えた。結婚とか、あまり先のことは考えていなかったし、彼の部屋で長い時間を過ごすようになって、居候なりに何かできることをしようと思っただけなのだ。一度彼のお母さんが田舎から上京してきたときに会わせてもらったことがあったが、そのとき何か具体的な言葉を言われたわけではなかったし、私はなんとなく良い機会だったから会わせてくれたのだろう、くらいにしか考えなかったが、彼はもしかしたら意識していたのかもしれない。あるいはもしかしたら、勝手に掃除をしたり料理を作ったりする私の行動によって、まだ若い彼にプレッシャーを与えていたのかもしれない。そんなのは、今思えば、の話だ。当時の私は何も気づいちゃいないし、深く考えてもいない。

だから私には、英一が突然別れを切り出したように見えた。

「好きなのかどうかわからない」

英一がそう言ったとき、私はすでに英一の部屋に存在していた自分の荷物をまとめ始めていた。英一が距離を置きたいというのだから、私はここにいてはいけない、と思い、でも、英一が止めてくれるのを期待していた。毎日を過ごすうちに少しずつ増えていった、大量の服や持ってきていたCDを、私はほとんど袋に詰めていった。英一はずっと、ただ黙って見ていた。英一は、何も言わなかった。私が、黙々と服や靴を詰め込んでいる間も、ただそれを見つめるだけだった。

それで、ぼろぼろと涙が出て止まらなくなった。やっぱり向いていないんだろうか、と私は泣きながらぼんやりと思った。私は、「まっとう」には向いていないんだろうか。努力していると思っていたのだ。英一との関係を良好に保つために、努力したつもりでいた。私は、君を傷つけるまで別れない、と言った元彼の言葉を思い出していた。元彼を失うのはちっとも怖くなかったのに、英一を失うことは、自分でも信じられないくらいに怖かった。

ハンムラビ法典、と私はふと思った。自分のしたことは必ず自分に返ってくる。宇宙の法則。

私がここで、というと、タクシーは音も無く狭い住宅街の道路の脇に停車し、運転手はそそくさと外に出た。彼は私が財布から小銭を出している間、トランクから、ビニール袋二つと、布製のトートバッグ一つにまとめられた荷物を出して、マンションの入り口まで運んでくれた。私は開いたドアから外に出ると、お礼を言って料金を払った。

「元氣出しなよ。まだ若いんだから」

ブレザーのスーツを着た、70近いと思われるそのドライバーは、そう言うのと背中を丸めて車に乗り込んだ。私よりもずっと長い時間を生きている彼には、今日私の身に起こったことなんかよりもずっと辛いことがたくさんあったんだろうな、と私はふと思った。それらに比べたら、男にフラれることなんて屁でもないんじゃないかという気さえした。それなのに、このおじいさんはきつと、自分の孫娘に対しても、こんなふうに気を使っただろう。

私は、走り去るタクシーを見送り、大きな荷物を抱えると、それを4階の部屋の入り口まで運んだ。この古いマンションにはエレベーターがないので、私は階段を一往復半しなければいけなかった。

誰もいない部屋に入るのは、少し怖い気がした。それから、これからは一人で生活しなければいけないことを考えて、少し憂鬱になった。もともとはちゃんと一人暮らしをしていたのに、一人という状況が恐ろしいような気がして、もしかしたら私はただ一人が怖いから英一と付き合っていたのかもしれないとさえ思った。

本当はもつと前になんとなく気づいていたのだ。英一が私との関係に疑問を感じ始めていたことを。私もそんなに鈍感じゃない。ただ、その不穏な空気を持て余した。わかってはいても、どうしていかわからなかった。私には英一の気持ち痛いほどよくわかっていた。

英一と付き合う前、つまり英一が存在によって別れることになった男とは、もともとあまりうまくいっていなかった。と先にも書いたが、それはたぶん私のほうに原因があった。たぶん、というか、かなり決定的に。男の方が実際どう思っていたか、詳しくはわからないが、少なくとも私はそう思っている。

具体的に言うと、彼と付き合ってから別れるまでの3年半の間に、私

は4人の男と浮気をした。ここでいう浮気と言うのは、交際相手以外の男性に体の関係を持つ、という意味での浮気だ。実は4人とも、彼と別れてちゃんと付き合おうと思うような男ではなかった。実際、一晩だけ、というのがほとんどだ。気の迷い、とか、一時的な感情とか、私をもつと正直な女なら、そんなふうに言い訳しただろう。ともかく、それはフラれるのにはじゅうぶんな要因だと思う。

それでその事實は、4人目との関係の後、元彼も知ることになる。しかし彼はそれをすべて知った後も、私との関係を続けた。

彼が私宛の電子メールを読むことによつてその事實が発覚したとき、彼はもちろん私を非難したし、最低だと言った。もともとそれほど饒舌ではない男だったが、その日はそれまで彼が一度も口にしたこともないような汚い罵声を延々と私に差し向けた。それは確かに苦痛ではあったが、一通り吐いてしまえばいつか終わりが来ることとがわかっていたので彼が言い終わるまで私はじっと待った。しかし普段温厚な彼の口から出たその言葉の汚さに、私はむしろ驚愕した。(あまりにひどい言葉なので、彼の名誉のため、ここにはあえて書かないことにする)

私はただ謝った。圧倒されたのかもしれない。ただ、何を言っても意味がないと思ったので、言い訳らしい言い訳もしなかったと思う。そんな言葉を吐かせるくらいに、私は彼を傷つけたのだろうと思った。しかしその私のやり方は、彼にとつては、逆に納得のいかないものだったようだ。とつてつけたような言い訳をしたり、自分の非を認めないような逆切れを起こしてくれたほうがまだマシだった、と後々、彼は言った。

私はそのとき、間違いなく自分がフラれるのだろうと想像していた。なぜ自分がそういうことをしたのか、そのときは自分自身がよくわかっていなかった(あるいは自分自身ときちんと向き合うことを放棄していた)が、しかし常識的に考えて、自分は悪いことをしたという認識もあつたし、罪悪感もきちんと持ち合わせていた。私は彼

を傷つけたことをとても申し訳なく思い、責められても、それは当然だと感じた。嫌われた末にフラれるのを覚悟していた。だからこそずっと隠していたわけだが。

ただ、もし4人目でバレなかったとしたら、5人目の存在があったらだろうか？あつたかもしれない。その可能性は今も否定できない。

ともかく、彼が別れたくないと言ったとき、私はとても納得がいかなかった。

彼は、今は、別れたくないと言った。君を傷つけない、とそのとき彼は言った。僕が傷ついたのと同じくらい傷つきたい。傷つけるまでは別れない。目には目を、だ。ハンムラビ法典だ、と私は思った。自業自得だ。

そのあと彼との関係は2年もの間続いた。いつまで付き合ったら、自分が彼に対して責任を果たすことができるのかについて、私はずっと悩んでいた。悩みながら付き合いを続けた。実を言うと、付き合い、という行為はとても簡単なことなのだ。定期的に会って、たまにセックスをして、たまに旅行に行けばいい。ただし、その間は必ず、楽しそうにしていること。セックス以外は、それなりに楽しむことができた。セックスはほとんど我慢するしかなかったが、以前のように浮気をする気にはならなかった。私はとても失望していたのだ。いろんなことに失望して、いろんなことに諦めを感じていた。

そうしているうちに、彼が私を傷つけることができ、彼が納得できたら、別れることができるんじゃないかと私はのんきに思っていた。そうすることで、もしかしたら報われるのかもしれない、と思っていた。別れるために付き合っていたわけだ。

私は最初から傷ついていた。彼に傷つけられたのではなく、自分

自身によってすでに傷ついていたのだ。彼が私を、彼の手によって傷つけられるわけがなかった。

そんな頃、英一と出会った。英一は、私とはだいぶ違った。私に彼氏がいることを知っていて、だから何もしてこなかった。お互いに好意を持っていることは明らかなのに、英一は私に触れようとしなかった。2人きりで食事に行っても口説いたりしなかったし、混雑した電車の中で密着しても、わざわざ体を離すようにした。意識してそうしている英一が、とても健全に思えた。まっとうな人だ、と私は思った。

その「まっとう」が私は欲しくなった。自分は「まっとうじゃない」と思っていたから、英一の正しさみたいなものが、まぶしく見えた。それで、私は責任を果たさないまま、そのハンムラビ男と別れた。何しろ浮気されても別れないという男だったから、別れるのにはそれなりに苦労したが、私は時間をかけて彼と別れた。要するに私は彼と別れるのが面倒だったのだと思う。時間が掛かることが目に見えていたから、付き合っているほうがラクだったのだ。

男は、友達としてときどき会ってくれるなら別れてもいい、というよくわからない条件を出してきて、私はとりあえずその条件を飲んだ。その条件に何の意味があるのか、私にはさっぱり理解できなかったが、とにかく別れることができるならなんでもよかった。もしかしたら彼は、友達としてでも私を傷つけたかったのだろうか？

ともかくそれで、英一と付き合い始めた。付き合い始めてみたら、英一はやっぱり「まっとう」だった。常識的で、世間体を大事にした。私はなるべく彼の価値観や考え方みたいなものに合わせるように努力した。それで、自分も「まっとう」になれるんじゃないかと思っただ。もちろん浮気なんかしなかったが、英一はよく、浮気は絶対に許せない、と私に言った。過去のこととはいえ、自分が浮気をした

ことがあるなんて、とても言えない空気がその言葉にはあった。

1 往復半の上り下りのあと、息を切らしながら1kの狭い部屋の鍵を開けると、急いで電気をつけた。それから、部屋がホコリくさいような気がして、とりあえず窓をあけた。もうこの時期に虫が入ってくることもないだろうが、念のため網戸は閉めた。

それだけやると、上着を着たままベッドに倒れこみ、ふと思いついてカバンから携帯電話を取り出した。別れ際、念のため到着したら連絡するように、と英一は言った。その言葉に、まだ嫌われてはいないという希望を持つこともできなくは無かったが、しかしそれだけでその先の関係を期待できるほど子供なでもなかった。悔しいので、「着いたよ」とだけ書いたシンプルなメールを送った。英一からは返事は無かった。

私はまた悲しくなつて、気を紛らわそうと携帯のメモリの「友人」フォルダを眺めた。日曜日の夜7時にそれほど忙しくしている友達はいないつもりだった。決心して、なるべく最近まで連絡を取っていた十人を選び出し、一括でメール送信した。なるべく落ち込んでいる雰囲気にならないよう、短い文面を打ち込んだ。

五分、十分そのままぼんやりしていると、ぞくぞくと返事が返ってきた。といつても、リアルタイムで返事が来たのは普段からメールのやり取りをしている男友達ばかりだ。

もっとも、「最近まで連絡を取っていた十人」の中で女性といつたら、もうすでに寿退社して名古屋に引っ越してしまった一人しかない。男社会で生きてきた私にとって、友達といえは99%が男だった。こういうとき、実は男友達というのはあまり頼りにならないことを、私は知っていた。でもないよりマシだ。そういえば英一には友達らしい友達がいなかったな、と私はふと思った。

「ふられた」メールに対しての返事は相手によってさまざまだった

だが、やたらと長文で慰めてくれているものもあれば、熟考した上でなのか深く考えずになのか、シンプルに「元気出せよ」とだけのものもあった。

『気にすんなよ。別れて良かったとオレは思う』

『え〜〜！チョーびっくりしたよ

大丈夫?? 元気出してね！

また飲みに行こうよ！』

メールの文面にはそれぞれの人となりが見えるようで、少し気が紛れた。涙はいつのまにか止まっていた。もともと、自分が悩んでいることや傷ついていることを友人に明かすというのはほとんどなかったが、何もしないよりはマシなんじゃないかと思ったのだ。少なくともメールを打っている間は、英一のことを考えずに済んだし、その行為によつて、少なくとも自分が一人ではないと勘違いできた。そのくらい、私はダメージを受けていた。私はすぐに返事をくれた何人かに、またすぐメールを打つと、少し寒くなつたので窓を閉めた。上着を脱いでエアコンのスイッチを入れた。古いエアコンは、大きな音を立てて動き始めた。テレビとパソコンのスイッチを入れて、これからの週末はいつたい何をしようかと考えて、また憂鬱になった。テレビゲームだとか競馬だとか、英一の趣味に付き合ふのが趣味、みたいな週末ばかりだった自分を、少し、いやだいが、惨めだと思った。

突然、電話の着信を知らせるメロディが鳴った。私は一瞬英一かと期待して、ディスプレイに表示された友人の名前を見て少しがっかりした。一括送信したうちの一人からだった。だいちゃんは平日のランチをよく一緒に食べるメンバーの一人だった。通話ボタンを押して電話を取ると、

「もしもし、大丈夫か？」

と彼は言った。それから、今から横浜まで来ると言い出した。

「今から？」

「うん。京浜東北線に乗ればいいんだろ？大森から何分くらいかかる？」

「たぶん、15分くらいだと思うけど」

「んじゃ30分以内に行くから。飯食ってないよな？おごつてやるよ」

本当のことを言えば、彼と平日の会社以外の場所で会ったこともなかったし、ましてや彼と二人きりで食事なんかしたこともない。私は少し面食らった。単に報告をしようと思ったただけなのに、想像もしなかったことが起こった、と私は思った。気安く誘いについていいんだろつか、と私はどちらかというと自分自身のやや軽率な性格を思った。相手は同僚だ。何か間違ったことになるその後が面倒になる。

が、もう男と二人で会うのに誰に気を使う身分でもない、ということに気づくと、どちらかというとかやけっぱちな気分で、わかったと答えた。少なくとも私はもう「まっとう」である必要はなくなったのだ。

電話を切ると、さっき脱いだ上着をもう一度着て、念のため鏡で自分の顔をチェックし、つけたばかりのテレビとパソコンの電源を落とした。

加藤大祐は、横浜駅構内の駅ビルの入り口で待っていた。3年前、入社当時には、色白でメガネをかけた、いかにも理系男子だったの

に、気がついたら髪を短く切り、メガネもコンタクトになって、白い歯もさわやかな好青年に成長していた。きつと、入社当初からずっと付き合っているという彼女の影響なんだろう。もともと身長もそこそこだし、週末にやるというフットサルのおかげか、それなりに体格も良いから、そのスタイルは彼に良く似合っていた。その日彼はベージユのコットンセーターにジーンズという格好で、駅ビルの入り口手前の柱に寄りかかって立っていた。

私が後ろから彼に近づき、ぽんぽん、と肩をたたくと、ちよつとおおげさなくらい彼は驚いた顔をした。

「びつくりさせんなよ」

「何言ってるの。呼び出したのはそつちだよ」

日曜の20時とは言え、構内はそれなりに人が多い。私たちは地下街の方へ向かい、その中のレストランで食事することにした。彼はあまり横浜には来ない、といい、私が地下街に何件かレストランがあると提案した。それで、適当に歩いて見つけたイタリアンの店に入った。彼は普段よりもわざと明るく振舞っているように見えたが、おそらく気を使ってくれていたのだろう。

「そっういやハギと会社以外で会うの、ログハウス以来だな」

私は、友人や知人の間では、主にハギと呼ばれていた。「やはぎ」という苗字だから、ただそれだけの理由だった。私のことを「くみ」という下の名前で呼ぶのは、今のところ両親と英一だけだ。そしてもう二度と英一に私の名前を呼ばれることはないだろう。

私とだいちちゃんを含む、同期の仲良しグループは毎年、会社が管理する保養所へ旅行に行った。ログハウスというのはその保養所のことだ。

「そういえば、最近飲み会も減ったね」

「そうだな。よし、来週にでも集まって、『ハギを励ます会』でもやるか。オレみんなに声かけるわ」

「えー。普通の飲み会でいいよー。なんか恥ずかしいし」

そんなふうには、私たちは当たり前障りのない話をしていた。だいやんは格好つけてワインを注文し、私は、白じゃないと飲めないよ、とだいやんに釘を刺した。いつもと違う日曜日だった。私は少しの間、英一のことを思い出さずにいることができた。

涙を流して水分が不足していたのか、ワインは染み込むように私の体の中を満たした。アルコールが猛スピードで体中の血管から血管へ流れていった。私の頬はすぐに赤くなり、私は加藤大祐に対し、たぶんいつもよりも少し気を許していたと思う。それまで彼とは毎日のように顔を合わせていたが、あくまで大勢の中の一人だった。しかしまったく気にも留めなかった存在の男と、二人きりで酒を飲んでいるといふ非日常的な状況が、私に多少の興奮をもたらした。あるいはそれはお酒の力によるものだったのかもしれない。どちらにせよ、もし今だいやんに誘われたら、一晩一緒に過ごすのさえ簡単に許してしまうだろうと思った。そしてそんなことを考えている自分は少し怖いと思った。やっぱり私は「まっとう」じゃない。そんな私の心配をよそに、だいやんは終電の時刻が近づくと、私をきちんと東横線の改札まで送り届けた。私は改札の中に入ってから、振り返ってベージュ色のセーターを着た彼に手を振った。Vネックのセーターの下には、何も着ていないように見えた。もしかしたらVネックの下着か何か着ていたのかもしれない。私は少しほっとして、そして、まっとうだ、と思った。

「思ったより元気そうで良かったよ」

だいちゃんは別れ際にそう言った。私は、今日という一日の最後に会うのが、英一じゃなくて良かった、と思った。

男友達

あれから二週間が過ぎた。

いったん別れたものの、英一からは毎日のように電話が来ている。音沙汰がなかったのは、別れてからの三日間だけだ。

とはいえ、よりを戻したつもりはなかった。実際、今後の2人の関係について、ちゃんとした話し合いというのは1ミリもされていない。もつとも、そんな大事な話を電話でするのもどうかという気もする。

私は、平日の夜はたいがい自宅にいた。テレビがつまらない日は友人に電話をかけ、同じようにヒマな男友達と食事に行った。もちろんそれは友達として、である。しばらくは恋愛をする気分になれなかったし、私にとって、友達というのは友達でしかなかった。男社会で生きてきた私にとって、男友達に対し「女をアピール」しないようにする、というのはごく簡単なことだ。

平日は、なるべく深夜にならないうちに帰ってきて、ユニットバスでシャワーを浴び、就寝の支度をした。24時になる前には、いつも英一から電話が来た。英一は五分から十分くらい話すのが済むらしく、おやすみと言って電話は切れた。毎日同じ時間だ。彼はもしかしたら私を試していたのかもしれない。

平日はいつも英一の声を聞いてから眠った。

今日も、いつもと同じ時間にかかってきた電話を取ると、英一は今何してる？と聞いた。私はそのときテレビを見ていたので、4チャンネルを見てる、と正直に答えた。金曜日のテレビはあまりおもしろ

くない。

「ヒマなら来ない？田舎から大量に米が送ってきたんだ」

米で釣られたつもりはなかったが、すでにパジャマ姿だった私は、電話を切るととりあえず外に出られる格好に着替えた。念のため下着を用意しカバンにしまつと、メイクもせずに駅に向かった。深夜というほどの時間でもなかったが、明日は土曜日だし、もしかして長話になるかもしれないと思ったのだ。

電話では当たり前障りの無い話しかしなかったが、二週間ぶりの再会によつて、何か現状が進展するのかもしれないという淡い期待はあった。

私は、英一が謝るとか、よりを戻すとか、そういう話ができることを期待していたと思う。失いかけたものをなんとか繋ぎ止めることができたんじゃないか。ふと、どこかの雑誌で読んだ恋愛相談の記事の内容を思い出していた。別れ話をされたら、泣きながらすがつたり嫌がつたりしてはいけない、あっさりと身を引け。そのようなことが書いてあったと思う。人は、いざ手放すとなると急に惜しくなるものなのだ。

英一は関内駅まで私を迎えに来た。付き合っていたときは、迎えに来てくれることなんてほとんどなかった。英一は、来てくれてよかった、と言った。クミがいなくて寂しかった、とも。私は、その言葉を喜ぶ笑顔の裏側で、少し幻滅している自分に気づいていた。これってたぶん、「まっとう」じゃない。

結局その日は、これからの二人の関係について、話し合うということとはなかった。でも実はそんなことはどうでもよかった。どうやら英一は結局、私を失いたくないと思っていて、それは間違いない。それで十分だ。私の勝ちだ。私はもう負け犬じゃない。幻滅なんて、大したことじゃない。

とりあえず、私たちはその夜びったりとくつついて眠った。

その週末は、別れる前とほぼ同じように過ごした。実はあれは夢だったんじゃないかと勘違いしそうになるくらい、二週間前までと同じ週末だった。違うことと言ったら、英一が別れる前よりも優しいことくらいだ。しかしそれは、私の優越感をくすぐった。「まっとう」かどうかなんて、この際どうでもよかった。

日曜の夜まで、私は英一の部屋にいた。

その次の週も、金曜の夜に仕事が終わりに、服を着替えると、何も食べないまま駅に向かった。仕事終わりの英一と待ち合わせをして、夕食を食べるため近くのファミレスに入った。

「最近忙しくないんだね」

運ばれてきた豚キムチ鍋定食をつつきながら、私は英一に話しかけた。

「まだ始まったばかりのプロジェクトだから」

ハンバーグをナイフとフォークで丁寧に切り分けながら、英一は私のほうを見ずにそう言った。あの日からずっと、まるで禁句のように、あの日についての話を二人とも避けている。

英一は同業者なので、私は彼の仕事が忙しくなったり暇だったりする事情をよくわかっていて、別れる少し前、彼は何日も帰ってこないことがあった。そんなときでも、私は一人英一の部屋で英一の帰りを待った。彼の匂いがする部屋で彼の帰りを待つというのは、けっこう辛いことだ。もうすでに食事を用意したのに、『ごめん、帰れない』というメールが来る日もあった。

仕事だから、と私は何も言わなかった。帰れないんじゃないじゃ仕方が無いと思つた。彼を責めてもどうしようもないのだ。

もともと彼はあまり仕事の話をするのが好きでは無いらしく、私が振らなければ自分から話すことはなかった。私もそれほど興味があるわけでもなく、それほど突っ込んで聞くこともなかった。

しかし私たちは、もともとは同じ職場で同じ仕事をしていた。今はもう別々の場所で違う仕事をしているが、当時私は英一の上司という立場だったし、仕事をしているときは仕事の話をしていた。

それももう1年前の話だ。

三週間のうちに、「営業の女の子」と英一がどんな風に進展しているのか、あるいは進展していないのか、まったく気にならないと言えは嘘だったが、それについてはなんとなく聞かなかった。あるいは聞いたとしても、だからどうするという気持ちもあつた。本当は、あの日から、私の中の英一に対する気持ちは、どんどん冷めていった。残っていたのはプライドと優越感だけだ。

しかし私は英一に対して、まだ未練を残しているフリをしていた。でもそれを認めればまた「傷つける側の人間」になってしまう。英一が優しくしてくれるうちは、私はそれに付き合うしかなかった。真面目な英一のことだから、そのうちその「営業の女の子」との関係がうまくいけば、別れを切り出すのだろうと私は思っていた。だからこれは英一と私の問題なのであって、「営業の女の子」の存在はあまり関係が無いのだ。

あの日、実は別れを切り出したのは私だった。しかし先に距離を置きたいと言い出したのは英一の方だ。他に気になる人がいると言つて、自分の気持ちがわからないと言い出したのも彼の方だった。彼はよくも悪くも正直者だった。もともと嘘をつけないタイプなの

だろう。

「先週の水曜日」

そのとき私は本を読んでいて、英一に話しかけられたことに、少したつてから気づいた。私は本を読むのをやめ、ソファの脇に、居心地悪そうに立っている英一を見上げて、その先を待った。

「営業に仲いい女の子がいてさ。その子と食事に行っただ」

私は頭の中で、英一の言葉を反芻した。それから、「先週の水曜日」について思い出そうと努力した。そう、先週の水曜日といったら、彼がいつもよりも少し遅めに帰ってきた日だ。でも深夜というほど遅かったのもなかったと思う。終電よりは早い時間だ。

「言うつもりはなかったんだけど、オレ、嘘つけなかった」

私は、彼が残業で遅くなったものだとばかり思っていた。実際に、その日はそういう連絡を受けていた気がする。英一が自白しなければ私はまったく疑いをもたなかっただろう。疑いというか、それはすでに事実だった。要するに嘘をつかれたのか、と私は思い、突然の英一の「告白」に、動揺した。そのとき私は、自分が何を考えなければいけないのか、彼が何を言いたいのか、まるでわからなくなった。ただ、私が浮気相手に送ったメールを見つけたとき、元彼もこんな気持ちになったんだろうか、とふと思った。

その「女の子」は、英一にとって何なのか。冷静になればそれはごく簡単な命題なのに、私はよくわからないフリをした。英一が私の言葉を待って黙っていたので、とりあえず、泣き崩れてみた。

「その子と、別に付き合いたいとか思っていないんだ」

私を慰めようとしているのか、あるいは正直な気持ちなのか、英一はそんな煮え切らないことを行った。泣いている私に、そばにあったティッシュケースを渡しながら、英一は続けた。

「ただ最近、クミのことが好きなのかどうか、よくわからない」

英一のその言葉に、私はすべてを悟った（気がした）。力なく立ち上がると、台所から大きなビニール袋を2、3枚取り出し、クローゼットへ向かった。英一が何を言いたいのか、私には、痛いほどによくわかった。なぜか私は元彼のことばかり思い出していた。罵る言葉。私を傷つけたいと言った元彼の言葉。

私が今ここで何を言っても無駄だということを、私自身がよくわかっていた。

「もういい。」

私は言い、所在なさげに立ちすくむ英一の顔を見ずに、クローゼットの扉を開けた。

その日、だいちゃんが私を慰めるために横浜まで足を運んだことは、同期のランチ仲間の全員が知っていた。後日みんなで飲みに言ったときに、私はその話をしたのだ。

「声がぜんぜん大丈夫じゃなかったんだよ」

「そんなこと言ってお前、ぜつたい下心あったら」

「そつだそつだ。メール来たからっていきなり電話するのもおか
し」

「だいちゃんはなぜか言い訳をするはめになった。下世話なユウジとオスギがだいちゃんをからかったからだ。実はユウジは以前から、だいちゃんが私に気があるのではないかと疑っていた。しかしだいちゃんにはずつと彼女がいたし、だいちゃんが他の友達と何か違う好意を私に向けているとも感じられなかったので、それはないと私は否定し続けていた。」

「そんなことないって。お前ともしょっちゅう電話してるだろが」

「だいちゃんがあんまり必死なので、私は少し苦笑いしながら、本当に食事しただけなんだよ、と彼をかばった。かばうしかなかった。話したことを少し後悔したが、しかし隠していて後でバレるよりはマシだと思った。だいちゃんと私の、友達としての関係のために。」

「もしお前らがフラれて落ち込んでたとしても、オレは慰めに行くから、ちゃんと報告しろよ」

「だいちゃんが言い切ったので、リーダー格のモッチが拍手を捧げた。」

「いや、加藤はえらいと思うよ。オレはわざわざ日曜の夜にさ、友達を慰めるためにだけに電車に乗りたくないよ。ハギからメール来たときもさ、返信したあとは普通にプレステしてたもんね。そりゃあメール見たときはおやつと思ったけどさ。いやいや、加藤はホントいいやつだよ」

モッチが認めたので、その場の全員がだいちゃんの功績をたたえた。その強引な展開に、私はモッチにだいぶ感謝しつつ、一人可笑しくなってけらけらと笑った。そんな私を見たオスギが、思ったより元気そうで良かった、と言い、この人たちがいてくれてよかった、と私は思った。男友達も捨てたもんじゃない。

「でも、ハギはあいつと別れてよかったと思うよ」

ふと、ユウジがそう言って、私は少しどきつとした。ユウジは私と同じフロアで働いているから、以前私と一緒に仕事をしていた英一のことでも知っていた。ユウジもタバコを吸うから、会話をしたことまではなくとも、二人が喫煙室でたまたま一緒になったこともあっただろう。

私はタバコを吸わないので、当時の喫煙室での英一の振る舞いについてはよく知らなかった。

「そう?」

「オレ、あいつのことあんまり好きじゃなかったな。話したことはないけどな」

ユウジはそう言って、しかしその理由については言葉を濁した。私はなんとなく、ユウジがそう言う理由はわかるような気はしていて、深くは突っ込まなかった。実際、英一には友達らしい友達がいなかったのだ。平日でも休日でも、英一が友達と遊ぶと言って私との約束を断るということが、毎日のように会っているにも関わらず、過去に一度もなかった。一番仲の良い友達と最後に会ったのが、2年くらい前だと言っていたこともある。それは友達と呼べるのだろうか？

「まあ、あいつなんかよりは、大祐の方がよっぽどいいやつだと思うよ」

ユウジが言ったので、だいちゃんは微妙な顔をした。

「それ、ほめてんのか?」

「ほめてるほめてる」

ユウジが茶化すように言い、だいちゃんがまたいぶかしげな顔を
した。

「まあ、ハギのことだからな。またすぐに彼氏ができるよ」

ヒデが笑いながら言った。そうだな、と何人かが声をそろえた。

「もう当分恋愛はいいや」

しかし私はそう言って、苦笑いしてみせた。少なくとも、英一と
二人でいる時間よりも、今こうしてこの人たちと笑っている時間の
方が、ずっと楽しい、と私は思った。

「よし、これでハギも”独り身の会”に仲間入りだな」

ユウジがはりきってそう言い、飲み会のときはちゃんと声かけて
ね、と私は念を押した。そのときすでに英一から毎晩のように電話
が来ていたが、なんとなく、それについてはみんなには言えなかつ
た。

「よくわかんないんだよね」

わざわざインターネットで探して購入したその黒電話は、ほこり
がつくとすぐに白っぽくなった。ティッシュを一枚取り、受話器を
耳に押し付けたまま黒電話の本体を拭いてやると、そのプラスチック
クの表面はまたつるつると黒光りした。パソコンの横に置いている
ので、ほこりが溜まりやすいのかも知れない。

「ありえないなー。オレぜったいそういうのダメ。はつきりしないとイライラする」

そう言ってだいちゃんは、受話器の向こうで語気を荒くした。私はちらりと壁にかかっている時計を見た。もう1時間以上も電話している。

「ぜったいもう会わないほうがいいって」

「そうかもねえ」

私は、だいちゃんの話の適当に受け流しながら、この電話をどういう流れで終わらせるかについて考えていた。このまま行けば、あと1時間は平気で話し続けるだろう。

だいちゃんは最近、よく平日の夜に電話をかけてくる。別れた直後って淋しいよな、と彼は最初言ったが、私と英一の関係が切れないことを知ると、どちらかという相談役になってしまっていた。それは面倒見のいい彼の人のせいだろう。

しかし、逐一私が報告するからか、だいちゃんはすっかり英一のことを嫌いになってしまったようだ。彼に言わせれば英一は、「男の風上にも置けない」、「史上最低の男」なんだそうだ。しかし、それは当然だという気もする。だいちゃんは私の話の中でしか、英一という人を知ることができないのだ。

その史上最低男に、一年以上も付き合っている私はなんなんだろうな、と黒電話のコードを指に巻きつけながら、私は思った。

なんだかよくわからないまま、誘われると英一に会いに行かずにいられない。あまり褒められた行為ではないと重々承知しつつも、もしかしたら私は、一人で過ごすのが嫌なだけなのかもしれない、

と思った。日曜の夜には必ず、もう1泊すれば、と英一は言ったが、用意がないから、と適当な言い訳を残して自宅に帰ってきた。自分なりのけじめとして、平日は会わないと決めたものの、それに何の意味もないというのは心のどこかで知っていた。

木曜の夜のことだ。私がテレビを見ていると黒電話がジリリリと鳴った。電話を取ると、おはよう、とだいちゃんが言った。

「もう夜だよ」

「さつきちよつと夜寝したんだ」

私たちはいつものように冗談を言ったが、その日だいちゃんは急に深刻になって、今日はオレの話を聞いてもらってもいいか？と私に言った。もちろん、と私が言うと、彼女と別れた、と彼は唐突に打ち明けた。

「なんで？三年だっけ、付き合ってたの」

「うん。まあ、ここんとこあんまりうまくいってなかったから」

「別れようとしてたなんて知らなかったなー。二人は結婚するんだと思ってたよ」

私が悪気なく言うと、だいちゃんは急に声を高くした。急にだいちゃんのテンションがあがったので、私は少し驚いた。

「そう！それだよ！オレまだぜんぜん結婚とか考えたくないのにさ、周りがうるさくてさー」

だいちゃんの元彼女とは、家族ぐるみの付き合いがあったと、以前聞いたことがあった。だからなおさら、話が進んでいるものと思

つていたのだ。実際だいちゃんのご両親が、彼女がいる前で結婚の2文字を持ち出したりすることもよくあったらしい。しかしそれでなぜ別れなければならぬのか、私にはさっぱりわからなかった。

「親も知ってる仲だと、そりゃそうだろうねえ」

「彼女もなんかその気だったしさ。オレ、プレッシャーとかダメなんだよ」

だいちゃんはそれから、ずっと彼女に対して疑問を持ち続けていることや、まだ1人でやりたいこともたくさんあるということや、要するにいろんな愚痴を吐き出した。それまで私の話を聞く側だっただいちゃんが、めずらしく饒舌に愚痴るので、私はすっかり聞き役になってうんうんと聞いていた。が、どちらかという彼女の方に少し同情していた。だいちゃんは私にぶちまけたうちのいつたい何割の愚痴を、きちんと彼女にも話したんだろうか。ただ、自分のことを棚上げる度胸もなかったもので、それは黙っていた。

一通り話すと、だいちゃんは、お互い失恋の身だな、と笑った。こっちは微妙だけどね、と私は言った。

「それにしても、何も別れなくてもよかったんじゃないの？」

私は少し心配になってそう言った。そもそも彼の結論が少し早すぎやしないか、と思ったのだ。

「いや、まあ、最初は別れたいとまでは思ってたんだけどね。最近ちよつと気になる人ができて、それはちよつとまずいな、と思つてさ。別れたつていうか、いったん距離を置こう、つて言つたんだ」

私は少し驚いた。平日は毎日のように話をしていたのに、彼にそ

んな人がいるということを私はまったく知らなかった。確かに私の話ばかりしていたから、それは当然といえば当然かもしれない。以前一緒に仕事をしていたと言っていた先輩かな、と私は思った。それともこの前オスギと行ったらしい合コンで知り合った人かもしれない。

「そんなの知らなかったよー。なんで教えてくれなかったの？」

私が文句を言うと、言えるわけないだろ、とだいちゃんが言った。

「なんでー。いいじゃん、どうせ私の知らない人でしょう？」

「知ってるよ。だから言えない」

「ええっ。私も知ってる人？そんなのなおさら気になるよ」

それから二、三回押し問答して、そろそろ私が諦めかけたころ、だいちゃんは突然白状した。

「オレが好きなのは、お前だよ」

一度言ってしまったから開き直ったのか、だいちゃんは毎日のように電話してきて、自分と付き合うとこんなに良いことがある、とさんざんアピールした。嫌いじゃないんだけど、というと、付き合いってみれば好きになるかも、と言う。だいちゃんは友達に対してはとても面倒見のいいお兄さん肌なのだが、好きな相手に対してはとことん突っ走るタイプのようだった。私は多少うんざりした。

「どうして私なの？」

私は何度かだいちゃんにそう聞いた。だいちゃんはいつも、

「そんなのわかんねえよ。理由なんかいるか？」

そう言っただけ相手にしなかった。やれやれ、と私は思った。嫌われるくらいのキツイ言葉で、いつそ突っぱねることは簡単だったが、友達という関係上、後のことを考えたり、もともと悪いやつではないことを知っているのも、なんとなく躊躇われた。私にとってはまだ彼は友達なのだ。失うには忍びない。

私が中途半端な態度を取っているからか、だいちゃんは今も元彼女と連絡を取っている、と言っていた。よりを戻すつもりはないが、元彼女の方から連絡が来るんだそう。元彼女の気持ちを想像して、私はさらに気が滅入った。よりいっそう混沌としている。

しかし私は、だいちゃんという人を、頭ごなしに否定するほど嫌いではなかった。まったく知らない相手なら、あるいはちょっと知ってる程度の相手なら、冷たくあしらうこともできた。しかしそれまで何年かの間、友達として付き合い合ってきたのだ。彼の良いところも悪いところも、ある程度は、知っているつもりだ。

だからできるだけプラスの方向で考えてみたりもした。彼が運転するトヨタのワンボックスの助手席に座る私や、街中で彼と手をつなく私や、仕事終わりに私の部屋に遊びに来る彼や、それから、彼に抱かれる私。恋人同士であれば有り得るような、ありとあらゆるシチュエーションについて想像した。想像の中の彼は優しくかつたし、きつとそれなりに楽しいだろう、と私は思った。それなりに。

しかしどうしても、想像上で彼の隣にいる自分について、嫌悪感を拭い切れないのだった。楽しいとか楽しくないとか、そもそもそれ以前の問題だ、と私は思った。私はどうしても、まったく新鮮な気持ちで新しい恋愛をスタートするという気分になれなかった。

彼が言うように、万が一とありあえずで付き合いしてみたとしても、好きになれないまま別れてしまったら、おそらく友達にも戻れない

だろう。私にとってはその方がずっと不幸のように思えた。彼と付き合うことよりも、友達としての彼の存在のほうが、私にとって重要だった。しかし付き合わないで「ごめんなさい」と言ったところで、やっぱり友達ではいられないだろう。

私は、ベッドの上でごろんと仰向けになり、うーん、と唸った。いったいどこで足を踏み間違えたのだろう。

「付き合うとか付き合わないとか、なんなんだよ」

私は独り言を言った。怒りをこめたつもりだったが、思いのほかその言葉は無表情に響いた。

だいちゃんが女友達だったらいいのにな、と私は思った。女の子だったら、こんな面倒なことにはならないのに。毎晩のように電話しても、毎日のようにメールをしても、何の問題もないはずなのに。

仰向けになったまま、天井からぶらさがるルームランプを見つめた。すぐにまぶしくなって目を閉じたら、まぶたの中に溜まっていた涙がこめかみの辺りを流れていった。

十八か十九の頃だったか、学生の私は夕暮れの教室でテスト勉強に励みつつ、なんだかんだと現実逃避して、教室にいた同級生とくだらない話をしていた。理系クラスだったので、私の友達は今と同じようにほとんどが男の子で、その場にいたのも私以外は全員が男子だったように思う。

でも私はもともとあまり女性的な部分を前面に出さない性格で、たいがいの男子は、同性のように私と仲良くしてくれた。私もまた、何年もかけて、女であることを意識させないように、アドバイザー的なポジションを確立していった。私は「話しやすい女」であるよう最大限に努力した。そうしなければ、男子の中で、自分が孤立し

てしまうからだ。しかし、孤立はしなくとも、実はずっと孤独だった。男友達に対し、私が気を許すことはなかった。

机に向かいつつも、男子の一人が自分の恋愛の話を始めた。私は恋に悩む友達に、何か励ましの言葉をかけたと思う。自分が何を言ったのか、今となっては思い出せない。私の言葉は、もしかしたら彼にとっては軽々しい言動だったのかもしれない。

「お前みたいな傷つける側の人間に、オレの気持ちなんかわかるか」

それまで楽しそうにしゃべっていた彼が突然そう言って、私は黙った。あるいは彼も、冗談のつもりでそう言ったのかもしれない。固まった私の表情を見て、彼も動揺しているように見えた。一瞬間があつて、周りにいた友人たちがその場をごまかした。それで私も、ごまかされたフリをした。

自分は、「傷つける側の人間」だったのか、とそのとき私は初めて気づいた。その言葉はまだ、私の心に引っかかったままだ。私は今もまだ、「傷つける側の人間」なのかもしれない。そのとき自分が何を言えばよかったのか、今もよくわからないのだ。

だいちゃんは毎日のように電話をかけてくれた。それは暗い気分が紛れるのでありがたかった。少なくとも、私はだいちゃんに救われていたのだ。なのに、私はだいちゃんに対して何もできない。私はまだ、「傷つける側の人間」なんだろうか。

ベッドの上で体を起こすと、少しめまいがした。

もしかしたら、人生で一度きりのモテ期なのかもしれない、と私は思った。モテてみたい、と思ったことがないとは言わないが、しかし、今自分が置かれている状況は、そんなに甘いものでも楽しいものでもなく、ただ空虚な時間が流れるだけだった。モテたいなんて、もう二度と思わないだろう、と私は思った。

歯車が狂っている。

英一にフラれることも、だいちゃんに告白されることも、私にとっては想定外だ。もう、いつそのこと全部クリアにしていまいたい、と私は思った。自分の中の何かが壊れてしまっているような気がした。

私はまた泣きそうになって、低い天井を見上げた。

涙

その日私は定時であがる予定でいた。チャイムが鳴る十分前、私は今日の分の作業が終わって、残りの数分をのんびりとニュースサイトを眺めて過ごしていたのだが、ふとカバンの中に入れていた携帯電話が振動する音が聞こえた。仲の良い後輩からのメールだった。

『ハギさん、今日ヒマー？』

彼が送ってくるメールはいつもすごく手短だ。その気軽さは嫌いではない。しかし自分の周辺がごたごたしていたこともあってか、私はここしばらく彼の存在をすっかり忘れていたことを思い出した。そういえばしばらく顔を見ていない。

『ヒマですよ』

手短なメールなら、こちらも気を使わずに手短に送ることができ。実は女の子同士がやり取りするような、顔文字つきの長文メールは、私はあまり好きではないのだ。それはおそらく、年代とのコミュニケーション能力が鍛えられるべき思春期時代を、男ばかりの環境で過ごしたせいにも他ならない。学生時代の環境が、さまざまな面において私からある意味での「女性らしさ」を奪った。

まあ、メールに関して言えば文面を考えるのがただ面倒なだけで、できれば要件だけですませたいというのが本音なのだが。最近では男でも面倒なメールを送ってくる輩がいる。

『飲みに行こうよー。定時であがる人？』

すぐに返事が来た。彼のメールは短い分、レスポンスも早い。

彼とは、一年に一度くらいの頻度で飲みに行こうと誘いが来て、行き当たりばったりに飲み屋に入り、大して酒も飲まずにひたすらお互いの恋愛事情について語り合う、というつかず離れずの関係をもう三年も続けている。もともとは私が2年目のときに、彼が新人として私が所属する部署に配属されたときからの付き合いだが、実際の年齢は彼のほうがずいぶん年上だというのもあってか、彼は最初、私に対してずいぶん馴れ馴れしい態度を取った。いや、馴れ馴れしいのは相手が私ということに限らないようなので、単に彼の性格なんだろうとは思う。

しかし私もまだ2年目だったから、あまり先輩後輩ということ意識せず、タメ口も話しやすい、くらいにしか思っていなかったりした。だいたい2人で飲みに行っても、彼は自分の話しかしないのだ。私はもともとあまり自分の話をするのが得意ではないから、彼のようなタイプは扱いやすかった、というのもある。

だいちゃんから、夜電話する旨のメールが来ていたが、そろそろ私は面倒になって、どうでもいいメールは返事をしないことがあった。だいちゃんに対して誠実である必要はなくなっていた。どちらにしても友達としての関係はすでに失っているのだ。少々の罪悪感に私は目を瞑った。

私は定時に仕事をあがって、本社の1階で後輩が降りてくるのを待った。

2時間後。

牛角は思いの外混んでいて、私たちは入り口近くのカウンター席に座っていた。酔っ払いばかりの店内は、「ワタミ」ほどではないにしてもそれなりに騒がしく、みな酒を楽しんでいるように見えた。私は2杯目のスプモーニをなるべくゆっくり飲んでいて、キタガワはビールを1杯とカシスオレンジを2杯、飲み終わったところだっ

た。

「それって都合の良い女ってことじゃん」

一通り自分の近況について説明すると、キタガワは話も終わらないうちにそう言った。私は多少むっとして、そうかもね、とあいまいに答えた。

「彼はたぶん八ギさんのことちつとも好きじゃないと思うよ」

キタガワは、まるで英一と話したことがあるみたいに、さらにそう断言した。あまりはつきりとそう言ったので、この人と英一が実は知り合いなんじゃないかとさえ思えた。それもかなり親密な仲の私は少しイライラした。何も知らないくせに、と私は心の中で強く思った。よっぽど、それを口にしようかと思ったくらいだ。何も知らないくせに。

もちろん、キタガワが私たちの関係をよく知っているわけがなかった。英一は以前私たちと職場を同じくしていたが、キタガワと英一が仕事上で関わることはありえなかつたし、一度見たことがあるくらいなら有り得たが、言葉を交わす機会はなかつたはずだ。それに、それまでキタガワが自分の話することはしよっちゅうあったかもしれないが、私が自分の話することはあまりなかつたし、話しても、私は表面的なことしか言わなかつた。私の話から、英一という人物像を作り上げるのは、かなり高度な技術を要するような気がする。

つまり私は、自分と彼との関係についてその程度の仲だと思っていたのだ。私が「まっとう」であるために努力したことも、いまだに英一が毎晩きちんと電話をくれることも、私が英一を失うことをどんなに恐れていたかも、彼は知らない。

「オレ、彼の気持ちわかるよ」
「どうして」

気づくと、追い詰められていた。あまりに腹が立っている自分に気づいて、戸惑ったのだ。

「彼を傷つけないとかいって、自分が悪者になるのが嫌なんでしょ？それは彼も同じだから、気づいてると思うよ。ちゃんと別れてあげなよ」

怒りのあまり涙が出ることは、ままあると思う。ありえない話じゃない。ただ、この涙が100%怒りによるものなのかというと、それもまた少し違うという気がした。

私は、後輩の隣でおしぼりを握り締めて泣いていた。なんだこれは、と、自分に対して思った。ただ、悲しくなった。泣きながらいるんなことを考えたような気がしたが、悲しみはブラックホールみたいにそれらをすべて吸い込んで、気が付いたらぼんやりして何も考えていなかった。うまく言葉にならない感情が突然襲ってきて、抗う暇もなく気が付いたら涙が出ていたという感じだ。

冷静になってみると、彼の言っていることは至極まともだった。まともすぎて、少し的外しているのかもしれない。一般論としての正論というものは、おうおうにして個々人の事情を無視した上で成り立っている。それでも、私は彼の言葉に悲しくなった。私は少し疲れていたのかもしれない。

おしぼりで目頭を押さえる私を見て、後輩は初めて私が泣いているのに気づいた。私の顔を覗き込むと、彼はさも驚いたように

「泣いてる！」

と言った。私が泣くようなことを、彼は言っ たつもりはなかったん

だろう。よほど驚いたのか、それきり黙ってしまった。この人は女性を泣かせたことがないんだろうか、と私は思い、そんなことはないだろう、と思い直した。私は少し恥ずかしくなって、彼の次の言葉を待ったが、彼は何か考え込んでいるようにも見えた。

好きでもない男の前で泣いたことなんてなかったので、ふいに自分の状況と後輩の対応が可笑しくなってきた、私は泣きながらくくつと笑った。なんだこれは、とまた思った。少し酔っているのかもしれない。

隣で泣いている女性に対して、この男はどんな言葉をかけるのだろう。それに少し興味がわいた。怒りはとくに私の中から消えてなくなっていて、まるで最初から怒ってなんかいなかったかのよう、私は心から可笑しくなった。私はもうしばらく後輩の言葉を待っていたが、やがてまた笑いがこみ上げてくる。笑いながら、さっきまであんなに怒っていた自分が、今こんなに可笑しくなっていることが心底不思議だった。おそらく、涙を流すと言う行為によって悲しみが発散されたのだ、と私は思った。

私が笑ったのを見て、彼は

「今度は笑ってる！」

とまた驚いたように言い、そして自分も笑い始めた。しかし笑っているキタガワを見ると、また腹が立ってきた。彼は心底おもしろそうに笑った。私は、またイライラしている自分にすぐに気づいた。そのイライラは、気づくと同時に自己嫌悪に変わった。私は苦笑いをしながら、やれやれ、と思った。この人と話していると、ジェットコースターみたいに感情が上がったり下がったりする。自分のペースを乱される。たぶんもともとは苦手なタイプなのだ。

キタガワは笑いが収まると、急に真面目な顔をして言った。

「でも、好きでもないのに付き合ってるなんておかしいよ。それ

は間違ってる」

私が泣いたにも関わらず、彼が何事もなかったように同じ話を続けようとしたので、私は、うん、とうなづきながら思わずまた笑った。無神経な男だ。彼は謝りもしないし慰めたりもしなかった。私は、彼に相談した自分が間違っていた、と思った。少なくとも今夜、私が期待するような言葉を、キタガワの口から聞くことはないだろう。むしろ、それで良かったのかもしれない。

しょうがないな、と私は思った。自分が間違えたんだから、それはしょうがない。

「ハギさんでも泣いたりするんだねえ」

彼がまたノーテンキにそう言ったので、鬼の目にも涙って言うしね、と私は嫌味をこめて冗談を言った。それから、追いつめられてもまだ嫌味を言う往生際の悪い自分にまた可笑しくなった。

22時をまわったころ、私たちは牛角を出た。彼は自宅が遠いので、飲みに行ってもいつも割と早く切り上げる。それは私にとって安心する要素の一つだった。それは単に彼の都合だったのだろうが、日付が変わるころには寝てしまふ、私にとっても都合が良かった。

22時半の東横線は、それなりに混雑していた。電車の中でつり革につかまりながら、私は今日感じた怒りや可笑しさについて思い出していた。彼と次にまた会うのは、とうぶん先のことだろう、と私は思った。もともと1年に1度会うかどうかくらいの仲だったのだ。今日のことをすっかり忘れたころにようやく、また誘いが来るんだらう。

しかし涙を流したからか、どこかすがすがしいような感覚があった。そして、英一と別れ話をしてから、初めて人前で泣いた、とい

うことに私は気づいた。むしろ、人前で泣くなんて十年ぶりだ。だ
いちゃんが会いに来てくれたときも、同期が飲み会を開いてくれた
ときも泣かなかったのに、どうして一年に一度会うかどうかもわか
らないような後輩の前で涙が出たんだろう？

私は後輩のことを、一番仲が良いわけでもなく、恋心があるわけ
でもない、ある程度距離のある相手だと思っていたから、自分が後
輩に対して心を開いたかどうかなんて考えもしなかった。ただ少し
疲れていたんだろうと思った。

白楽駅に到着すると雨の匂いがしたので、私は急いで自宅へ向か
う坂道を駆け下りた。

次の日、私はめずらしく自分からだいちゃんに電話した。だいち
ゃんは、私がメールを無視したことを怒っていた。返事くらいしろ
よ、と彼は言い、私は、やれやれ、と思った。彼が怒る理由をまっ
たく理解できなかったし、あるいは怒られる筋合いはないという気
もしたのだが、それでも私はとりあえず謝り、友達と会っていたら
夜遅くなっちゃって、と簡単な言い訳をした。

それから、”英一とよりを戻したからあなたとは付き合えない”
という旨をだいちゃんに伝えた。極力申し訳なさそうに、そうすべ
きだと思ってそう言った。実際のところ、完全によりを戻したわけ
ではなかったが、英一との関係がどうあれ、彼と付き合う気にはど
うしてもなれなかった。英一の名前を出したのは、その方が話が早
いと思っただからだ。

だいちゃんは傷ついたような声で、「それは残念だ」と言い、そ
れから、彼から連絡が来ることはなくなった。私の夜の時間は少し
手持ち無沙汰になり、ランチ仲間が一人減った。ユウジは一部始終
を知っていて、だいちゃんがランチにあまり参加しなくなったこと
について、気にするな、と私に言ってくれた。鈍感なモツチが、最
近だいちゃんの姿を見ない、と時々言い、私は少し後ろめたくなっ
たが、その度にユウジがさりげなく、最近忙しいみたいよ、とごま

かしてくれた。私は、また話ができるといいんだけど、と思い、それから、もうちょっと早くこうすれば良かったかな、とも思った。しかし、少し肩の荷が降りたような気はした。

その週末は、英一が私の部屋に遊びに来た。いったん別れてから、英一は本当に優しくなった。イベントはあまり好きではないと昔言っていたのに、クリスマスプレゼントを買いに行くと言い出したり、仕事が終わった後に電話をかけてきたりした。しかしどちらかというと、私にとってはそういうことはどうでもよかった。彼は私を失わないようにそうしているということが私にはわかっていたし、そういう努力がいつまでも続くわけじゃないというのは、経験的に重々承知していた。

これはゲームなのだ。

自分が、彼のそういう努力によって、彼に再度好意を持つことができるような、そういう女だったら良かったのに、と思った。高価なクリスマスプレゼントやマメな電話に、自分は幸せなのだ勘違いできる女だったら良かったのに。

しかしじゃあ自分にとって幸せとは一体なんなのか、あるいはそれまでどんなことで幸せだと感じていたのか、私はすっかり思い出せなくなっていた。

五分も待つと、スーツ姿の英一が階段を降りてきた。彼は私のかさの中に入ると、少し笑って言った。

「会いたかった」

私は返事の代わりに笑顔を返した。

いつものように、駅から続く500mほどの坂を下り、自宅に一番近いコンビニで2人分の弁当を買うと、それを私の部屋で食べた。英一はベッドに座ってミックスフライ弁当を食べ、私は床に座ってカツ丼を食べた。食べ終わってゴミを片付けると、二人でテレビゲームをしたりテレビを見たりして、日付が変わるころには狭いベッドにもぐった。シングルサイズのそのベッドは2人で眠るには狭かったが、私も英一も寝相が良い方だったので、それほど苦にならなかった。私たちはテレビゲームの結果についてひとしきり議論したあと、おやすみのキスをした。彼もあまり自分の話をする方じゃなかったから、二人でいるときの会話というのは、決して多い方ではなかったと思う。目を閉じたまま、おやすみと言って彼はすぐに寝息を立て始めた。

私はなかなか寝付けずに、英一を横目で見ながら、お泊り会みたい、とふと思った。小学生のとき、年に何回か、女友達の家遊びに行つて泊まることができたのだが、私たちはそれをお泊り会と呼んだ。もちろんお互いの両親の許可が必要だが、昼間にしか会えない友人とパジャマ姿で夜のプライベートな時間を過ごすというのは、より親密な感じがしてどきどきしたものだ。

しかし英一と私は2人ともそれなりに大人で、しかも英一は男で私は女だ。私たちはもちろんプラトニックな関係というわけではなかったが、毎日のように求め合うほど若くもなく、ただ並んで眠るだけのこともよくあった。

私は、英一もまた女だったら良かったのに、と意味のないことを考えていた。

お泊り会をした女友達とは、何回かの転校の末、もう連絡を取らなくなっている。今ごろはもう就職先を見つけて働いているだろう。私は彼女がスーツを着て働く姿を想像してみた。当時メガネをかけていた彼女は、最後に会ったときもやっぱりメガネをかけていたが、スーツ姿にそのメガネは良く似合うだろうと思った。

それから私はふと、英一も寂しいんだな、ということに気づいた。慰め合う関係、というのはきつところいうのを言うんだろう、と思いい、それはそれでアリかな、という気もした。いつまでもそれが続くということはないが、時期が来るまでは現状を維持していても許されるような気がした。

ふつつつと湧き上がる空しさには気づかないふりをしつつ、私は日々をこなした。

結局は私も英一も、誰も変わっていないということは知っていたが、そんなものかもしれないとも思っていた。日常は所詮同じことの繰り返しで、楽しいとか苦しいとか、そうあることじゃない、とどこか割り切っていた。変わったのは私とだいちゃんとの距離くらいのものだ。ただそれも、日々が過ぎれば私にとって取るに足らないことだった。

カウンセセル

だいちゃんから電話が来ることもなくなり、私は少し残業を多めにするようになっていた。もともとそれほど忙しい仕事ではなかったが、ノルマを早め早めに終わらせれば、もちろん評価も変わってくる。そして早めに終わった分、また別な仕事をもらえばいいのだ。それは「仕事」であるとともに「作業」でしかないが、私はそれなりに仕事が好きだ。

その日は、一時間ほど残業をして、19時過ぎには会社を出た。

「お先に失礼します」

OSをシャットダウンし、ノートパソコンを閉じると、席を立ち、まだ残っている数人のメンバに声をかけた。定時で帰ってしまうメンバもいれば、なんとなくダラダラ残業してしまう人もいる。仕事のやり方は人それぞれだ。

「おつかれさまです」

みな、パソコンから目を離さずにそう言い、私は彼らの後ろを通り過ぎてエレベーターホールに向かった。すでにエレベーターを待っている人の後ろに立ち、腕時計に目をやる。下りのエレベーターはなかなか来なかった。

エンジニアという仕事は割りと好きだったが、仕事なんていうものは、他に頑張ることがないときに頑張ればいい、くらいにしか思っていないかった。数人のチームを組んで、同じ目標に向かって物を作るために、それぞれの役割を決め、分担作業をするということ自体は面白かった。でもそれは、責任や自立を伴う「仕事」というよ

りは、学生が仲間と集まって何かするような、遊びの延長なのかもしれない。もともと出世欲とか、野心のようなものもあまりないから、自分が好きなだけ、納得するだけの仕事を日々こなすので、十分楽しくやれた。だいたい、人の上に立つのとか、ぜんぜん向いてないと我ながら思う。

その日、20時過ぎには自宅に戻ってきていた。部屋の電気とテレビのスイッチを入れ、上着を着たまま、オリジナルで買ってきたおにぎりとお惣菜の袋を開けた。どのチャンネルもあまり面白そうな番組ではなかった。私はパソコンのスイッチも入れた。おにぎりを食べ終わるとようやく上着を脱ぎ、お惣菜に箸をつけようとしたそのとき、携帯電話が着信を知らせるべく、カバンの中で振動し始めた。しばらく英一以外の人から電話が来るなんてことはなかった。私はすっかり英一だと思ったが、ディスプレイにはキタガワの名前が表示されていた。

キタガワとは、牛角で私が涙を見せた日以来だった。

あれからすでに1ヶ月ほどたっていたが、しかし彼と再会するのはまた1年後とかならうと思っていたので、私は何事かと思い、慌ててそのとき見ていたテレビの音を消した。

「はい、もしもし」

「もしもし、ハギさん？」

聞きなれない電話でのキタガワの声を聞いて、キタガワから電話が来たのは、実はその日が初めてだということに気づいた。飲みの誘いは基本的にメールだったし、会社で直接会って話すことはあっても、電話をする機会というのはあえて作らなければなかなかないものだ。私は少し緊張し、思わずベッドの上で座りなおした。だいちゃんのことがあったので、どちらかというところ少し身構えたのだら

う。

「どうしたの？めずらしい」

私が正直に驚いてみせると、キタガワはまるでそんなのはどうでもいいという風に

「そうだったけ？」

いつもの口調でとぼけた。実際、本当にどうでもよかったようで、彼の「恋愛相談」はその後すぐに始まった。いつも飲み屋で話すような内容だったので、私は安心して足を伸ばした。

「オレ今悩んでるんだよー」

今にもビールを注文しそうなノリだ。彼は愚痴っぽく話し始めた。

「オレのこと好きだっていう女がいるんだ」

「それは良かったじゃない」

私は思わず苦笑いした。ただの自慢話だったらすぐに電話を切つただろう。が、私はとりあえず最後まで話を聞くことにした。

話を要約するとつまりこうだ。

確かに彼は以前から、「好きでもない女」とスキーに行ったりデートをしたりしてきているという話をしていた。その女とは合コンで知り合ってから、何度か連絡が来たものだから、女友達の一人として、彼は誘いに応じてきたという。2人でスキーに行ったり、オフィスズンは旅行に出かけたりもしたらしい。そういえば前に会ったときはそんな話をしていたな、と私はキタガワが話し始めてだいぶ経つ

てから思い出した。他人の恋愛事情なんて、実はそれほど覚えていないものじゃない。だいたいそこまでキタガワに思い入れがあるわけでもないし、恋話なんて基本的にその場限りの話題だからだ。

「別に断る理由もないしさ。もしかしたら好きになるかもしれないし」

彼は先月会った際には、言い訳っぽくそう言っていた。しかし、二人きりでデートらしきことをしているのだとしたら、それはつまり「付き合っている」ということだろう、と私は言った。しかし彼は頑として「付き合っていない」と言った。彼が言うには、別に自分が付き合おうと言ったわけでもないし、彼女から言われたわけでもないの、「付き合っていない」んだそうだ。また、別に意識して二人で会っているわけではなく、もともと合コンで知り合ったような相手だから、他に一緒に遊べるような友人もおらず、必然的に二人きりになるだけだ、とキタガワは言い訳した。

確かに恋人になる前段階として、何度かデートを重ねる、というのはよくある話だが、しかし前段階の状態だとしても、体の関係はあるのかと聞くと、ある、と言う。それはずるいんじゃないの、と私は言った。我ながら、「まっとう」なことを言っている。別にその女に同情するつもりも、キタガワを非難するつもりもなく、ただ単に正論を言ってみただけだったが。あくまで一般的な意見として。

そのときは私が泣き出したこともあってか、その話は曖昧なまま特に何か解決策を議論するわけでもなく終わったような気がする。この電話はどうやらその話の続きなのだが、しかしあれから1ヶ月も経って、なぜ今日私に電話をかけてきたのか、疑問を感じつつ私はキタガワの話聞いた。

その日キタガワは、私に電話をする直前に、「好きでもない女」

と電話で話していたらしい。その女は電話口で、私たちはいつたいどうい関係なんだと彼を問い詰め、泣きだしたという。そういうことか、と私はおおよそ納得し、無理もないよ、と言った。無理もない。無償で体だけ提供するなんて、ムシが良すぎる。いや、たぶん体の問題だけではないのだが。

「もし、彼女が付き合って、って言うてきたらどうするの？ていうか、もう言われてるようなものだけど」

「うーん。今彼女いないしなあ。それは困るね」

「普通は彼女がいる場合に困るんだけどね」

私は苦笑いした。彼は実際に今日、その「好きでもない女」に問い詰められて、ようやく事の面倒くさを実感したらしい。私は少し彼を軽蔑したが、しかしそもそも彼は私に「相談」をしているのだから、私が彼に物事の善悪を説いてもなんの意味もないのだ。彼はいわゆる世間的な善悪などとうにわかっていて、だからこそ相談してきているわけだ。そして私は彼を正面から非難できるほど「まっとう」に生きているかという点、間違いなくそうではなかった。考えてみれば英一と私の関係だって、世間的に堂々と愛し合っているとと言えるかという点、残念ながらそうではない、と思う。

「だいたい、中途半端な気持ちで、付き合うとかってオレできないよ。なんで女はそんなに付き合いたがるの？ていうかなんで今のままじゃダメなんだろ」

悪びれなく彼がそう言い、私はどちらかという点すっかり呆れた。そのセリフに対しては、いろんな角度からツッコむことができただろうが、逆に言えばツッコミどころが多すぎるのだ。

もともと、彼には、入社した当時から他に片思いをしている女性

がいた。それは私は知っていたから、少し議論の視点を変えるべく、その片思いの相手についても聞いてみた。しかしそれは「断る理由」にはならないらしかった。確かにその片思いの相手は、どうもキタガワに気がないようで、彼は何度も告白しては断られていた。

3年間で3回告白した、と彼は私に言った。たまに二人で出かけたりもしていたし、ちよつとは気があるかと思つてたんだけど、全部フラれちゃった、んだそうだ。そういえばそれも、以前聞いたことがあつたような気がする。

つまりその片思いの相手とキタガワの関係は、ほぼ今のキタガワと「好きでもない女」との関係みたいなもののだが、しかしキタガワが、自分がされたのと同じことを他の女にしている、という認識はないようだ。往々にして、渦中の人間が事の本質に気づいていないことはよくあるが、どうやったら彼はそれに気づくことができるのだろうか。

もしかしたら、キタガワの中に、片思いの彼女のことを諦めたいという気持ちもあるのかもしれない、と私は思った。しかしキタガワが「好きでもない」のなら、その女は失恋の踏み台にはなりえない。

私は、彼の悩みがまったく理解できないわけではなかった。

一方で、電話口で彼を問い詰めた「好きでもない女」の気持ちも、理解できた。自分の気持ちはきちんと伝えてるし、体の関係もあるのに、付き合っているかどうかもよくわからないなんて、それは泣き出したくなるだろう、と私は思った。そう思ってから、自分と英一の関係について考えた。よく考えてみれば、そう変わらないのかもしれない。無償で体だけ提供する関係。ただ私も英一も、「好きでもない」女とは違って、問い詰めたり泣き出したりはしないだけだ。じゃあどうして私も英一も、泣き出さないんだろう？

「ぶつちやけ、付き合ってるかどうかなんて、オレどうでもいいんだよね」

キタガワが多少やけっぱちな感じでそう言ったので、やれやれ、と私は思った。

「あのさ、付き合うという契約があるうがなかるうが、やってることは同じだよ」

「そう、だから今のままでいいじゃん？なんでオレ泣かれたの？っていうかオレが泣かしたの？」

「普通に考えればそういうことになるねえ」

私はまた、意味もなくイライラしていた。

「付き合ったとして、どうせすぐに別れるんだよ。だって好きになれないもん。オレ、それは嫌だなあ」

キタガワは相変わらず悪びれなくそう言い、私は本当に腹が立ってきた。腹が立っている自分に気づいたが、今度はその怒りが収まることはなかった。

同時に、私は牛角で泣いたときのことを思い出していた。彼は臆せず、私のやっていることは間違っていると言った。あのときの彼と、今電話で話している彼は本当に同一人物だろうか？私にはわかに信じられなくなった。自分の言ったことをそんなに簡単に忘れるものだろうか？私は何であるとき涙を流したんだろう。

「あのさ、この前私に、好きじゃないなら別れる、って言ったのはキタガワだよ。あの言葉、そっくりそのまま返してあげるよ。」

私がそういうと、彼は急に黙ってしまった。思い出したのだろう

か？言ってしまうと、思いの他すっきりした。少し言いすぎかな？とも思ったが、私は特に後悔はしなかった。そのあと2、3言やり取りをしたが、キタガワは最終的に、わかった、といってあっさり電話を切った。

「やれやれ」

私は携帯をテーブルに置くと、声に出してそうつぶやき、ふと時計を見た。キタガワから電話がかかってきてから、1時間半以上が経っていた。思いのほか長話をしていたようだ。切っていたテレビの音量を元に戻すと、切ったばかりの電話がまた鳴り始め、今度は英一からだった。

「何度電話しても話中だったけど、誰と電話してたの？」

と彼は聞いた。私はまた少しうんざりして、後輩だよ、と正直に答えた。彼は納得したのかしてないのか、そうか、とだけ言った。

ふと、キタガワに言ったようなことを英一に言えたら、どんなにすっきりするだろうと思った。ただ私には、彼のように自分のことを棚に上げる勇気がなかった。

「自分が期待させるようなことしておいて、電話で泣かれて困ったんだってさ」

私は思い切って英一にキタガワの相談の内容を一部公開した。

「ひどい男だな」

私が茶化してそう言ったので、英一は少し笑って、私が想像した通りの言葉をはき捨てるように言った。まっとうな反応だ、と私は

思った。

どうしても良い世間話をして、五分もすると、おやすみ、と言って彼は電話を切った。

アジカン

あれからまた少し月日が流れた。

ある日英一は私に、「よりを戻したい」と言った。それは割りと突然の出来事だった。別れてから、2ヶ月くらいは経っていたと思う。私は今のままの関係がずると続くのかと思っていたので、英一がきちんとけじめらしきものをつけようとしていたことに驚いた。しかし、考えてみればまっとうな英一のことだから、中途半端な関係を続けるのは、彼にとっても苦痛だっただろう。2ヶ月、という時間が長いか短いかは、人それぞれだが、しかし、一般的にはそれは喜ばしいことなんじゃないかと思う。

あの日、クミをタクシーに乗せたあと、いろんなことを思い出したんだ、と英一は言った。

「クミと一緒にテレビゲームをしたこととか、クミが作ったご飯の味とか、そういうのを思い出したら、会いたくなってさ。何日かガマンしたんだけど、つい電話しちゃったんだよ」

英一はさも恥ずかしそうにそう言い、私は複雑な思いでそれを聞いていた。言ったあと、私の部屋のベッドに腰掛けていた英一は、そばにあったクッションに顔をうずめた。そして、照れくさそうに笑った。私は床に座ったまま、英一の次の言葉を待った。遠くの方で、小さな笑い声が聞こえた。それは音量を小さくしたテレビの音だった。バラエティ番組では、2人の芸人が漫才をしている。

ふと、英一が別れ話のときに話した、「営業の女の子」について思い出した。私は、よっぽどそれについて聞いただそうかと思っただし、あるいは、一般的には、そうするのが自然の流れのような気がした。確かに、それを確認してからよりを戻すのが、この状況においては筋のような気がする。しかし、その後彼女と英一の関係がど

うなっているのかなんて、自分にとってはまったくどうでもいいのだった。どうでもいい？本当にどうでもいいんだとしたら、それがなぜなのか、私はさっぱりわからなくなっていた。わからないのは、自分が一体どうしたいのか、ということだった。

最終的に、私は何も口にすることができなかった。うん、と私はただうなづいていた。床の上に敷いたクッションの上にひざを曲げて座った状態で、英一の抱えているクッションの模様を、ぼんやりと眺めていた。私の笑顔は、ちゃんと嬉しそうに見えるだろうか。よりを戻したい、と思っているように見えるだろうか。少なくとも、英一は私が喜ぶのを期待しているはずだ。

「いいよ。」

私は少し笑って、そう答えた。そう答えるしかないように思えた。

そういうわけで、あの日のことはほぼ「なかったこと」になった。とはいえ、よりを戻すという”契約”の前も後も、私たちの行動はあまり変わらないだろう。私はふと、付き合っているという契約があるうがなかるうが、やってることは同じなんだから今のままでいいじゃん、と言ったキタガワの電話を思い出した。

今日は金曜だったので、夜は英一の部屋にいた。テレビを見てみると、すぐ近くにおいていた携帯がマナーモードのために振動する音が聞こえた。私は英一の部屋にいた間、たいがいはマナーモード設定にしていた。それは、英一を心配させないため、の1つの手段ではあった。別にやましいことなんて一つもなかったし、来た電話やメールを隠すつもりはなかったが、あまり頻繁に音が鳴ると、英一は眉間にしわを寄せた。そして決まって嫌味を言った。

「友達が多いんだな」

私は、そう言ったあとの英一の横顔が、とても苦手だった。それは英一自身に友達が少ないことへのひがみなのか、あるいは私の友達に対する警戒心なのか、私はいつも量りかねた。英一は、私にとっても男友達が多いことを知っている。付き合い始めた頃、そうなっている理由を私は一応説明したが、頭で納得したからといって感情がそれについてくるというわけではないのだ。

ゲームに夢中になっていている英一の様子を見て、そつとメールボックスを開くと、キタガワからだった。

「アジカンのライブに行かない？」

当時ファーストアルバムを出したばかりのアジカンは、まだそれほど世間に認知されている存在ではなかった。それほど音楽に詳しいわけではない私は、もちろんその名を知らない。アジカン？と私は思った。携帯を見つめたまま、その4文字のカタカナが意味する存在について考えてみた。あるいは、自分が過去にその文字をどこかで一瞬でも見かけたことがあるかどうか、自分の脳内の記憶の糸を辿った。結論として、自分はそれを知らない、というところにたどり着くまでに、たぶん3秒か4秒かかったと思う。

「アジカンてなに？」

知らないと言う結論にたどり着いたので、何か冗談を返そうかとも思ったが、しかし英一の部屋にいたのでなるべく早くやり取りを終わらせなければいけなかった。いつものように、キタガワはすぐに返信してきた。それは機械的な速さだった。私はふと、もしかしてこの人は寂しいんじゃないかなろうか、と思った。

返信メールの内容によると、アジカンとは ASI AN KUNG

-FU GENERATIONの略だと言う。あまり意味のなさそうな単語の羅列。それは英語のように見えて、確実に日本人によって命名されたとわかる単語の並びである。そんな和製英語を作ることがができるのは、世界中で日本人くらいだと思う。

とにかく、見たことも聞いたこともないそのアーティスト名を見つめながら、しばし考えをめぐらせた。そして、インディーズかまたはキタガワの友人が趣味でやっているような無名バンドが、小さなライブハウスの中で一部のファンだけが盛り上がる中、あまり上手でない演奏をしているような図を想像した。実際に、昔付き合っていた男の趣味に付き合っ、そういうライブへ何度か出かけたことがあったのだ。

私は、そんな個人的なライブに、キタガワと2人で繰り出すシーンについて妄想を重ねた。薄暗い小さな箱の中に、数人の熱心なファンと、会場の後ろの方で音楽なんてどうでも良さそうに話を続ける若者。大きすぎる音がゆえにことさら不快に感じる未成熟な音。所在無く立ちすくむ自分。私の隣に立ってその音楽らしきものを聴いているキタガワ。

私は、どんな理由でそのイベントを断ろうか、少しの間考えていた。行くという選択肢は、ほとんどないに等しかった。あとは、断る理由を探すだけだ。そんな個人的なライブがどういうものか、少しは知っているつもりだったので、いくら相手がキタガワとはいえ、特に好意があるわけでもない相手と行くのは少しキツイ。

相手がキタガワじゃなあ。本心ではそう思いつつ、他の断る理由を探す。

「ライブの日程はいつ？」

念のため、日時を確認した。

「あさつての日曜」

そんな急な話、と私は少々驚いて、つまりチケットが余ったんだな、とやむを得ず私を誘った彼の事情を察した。なるほどね。きっと一緒に行く予定だった友人にキャンセルされたとかで、他に誘える友人もいなかったのだろう。やれやれ、と私は思った。私はいったい何にがっかりしている？

ゲームに夢中になったままの英一の横顔を盗み見て、私はその誘いを丁重にお断りした。

その代わりと言ってはなんだが、後日その「アジカン」が出しているアルバムを、キタガワが貸してくれるということになった。本当のことを言えばあまり期待していなかったのだが、彼らの音楽を聴きもしないで否定する筋合いは、私にはないと思ったのも本当だ。そこまでやり取りをして、私はキタガワとのメールの応酬を打ち切った。

やり取りが終わったあとで、そういえばキタガワとメールをする頻度が増えたな、とふと思った。

私が携帯を置くのとはほぼ同じタイミングで、ウィニングイレブンを二ゲームやり終えた英一が、

「誰とメールしてたの？」

と聞いてきた。私は正直に、後輩にライブに行かないかと誘われたが断った、と話した。英一は満足げに、そうか、と言った。

「ライブか。楽しそうだな。週末？行ってくればいいじゃん」

「ん・・・知らないし。アジカン。」

「アジカン？何それ」

英一は私が英一に気を使ったと思っているようだった。別に英一

のために断ったわけでもないんだけど、と私は思っ、でもそれは言わなかった。言っ、どうなるものでもなかった。英一の機嫌が少し悪くなるだけだ。

だいちゃんの話は、英一にも一通り話していた。それはもう終ったことだったので、話したところで何も変わらない。しかし、英一は私に多少の不信感を抱いているようだった。その不信感は、私に、というよりは、私の周囲の男友達に対してもかもしれない。無理も無い。私にとっての友達は、英一にとっては赤の他人なのだ。信用するにも理由が無かった。

私は過去に、私の男友達が原因で何度かそのとき付き合っていた男とケンカをしたことがある。しかし長い付き合いの男友達たちとの関係を、たった一人の恋人の存在によって断つことなどしたくなかったから、基本的には彼氏側に受け入れてもらうというスタンスを取っていた。英一の気持ちは理解できたが、あえて英一の不安を解消するような何か対策を講じたりすることはしなかった。もし以前だったら、もう少し気を使っ、たかもしれない。しかしどちらかというと、ただ面倒だったのだ。

私はもう、いろんなことがどうでもよくなっていた。英一が自分から離れようが離れまいが、どっちでもよかった。英一が勝手に私から離れて行っ、てくれるのなら、それはそれでかまわなかったが、しかし自分から別れ話をするのは、果てしなく面倒だった。

約束どおり、後日、私とキタガワはCDのために再会した。

いつものとおり1階のロビーで待っていると、いつものとおり彼はエレベーターから登場した。私は、相変わらずふてぶてしい、と、歩いてくるキタガワを見て思っ、た。

「よう」

といつものとおり、いかにも慣れ慣れしい感じで彼が腕をあげたので、私もとりあえず腕を上げた。

「その後、どう？」

「んー、ぼちぼち」

適当に会話しつつ、私たちはその日食事をする店を決めた。彼も私もそれほどお酒を飲むわけではないから、居酒屋に入ったとしてもメインは食事だった。

結局その日は、駅の南側に最近出来たばかりの和風居酒屋に入った。二名様ですね、と店員が言い、テーブル席に案内してくれた。向かい合って座るのは久しぶりのような気がして、私はキタガワの方を見れずに、カバンを肩から下ろしながらきよるきよると周りを見渡した。

とりあえず飲み物を注文すると、彼はさっそく話し始めた。

「別れたよ。」

「・・・何の話？」

「別れたっつーか、付き合っていないから別れたっていうのはおかしいかもしれないけど、もう会わないって言った」

それは先日電話で相談を受けた女の話だった。彼が突然話し始めるので、私は最初何のことかわからなかったが、キタガワが電話の話をしたので、私は思い出すことができた。それで良かったと思うよ、と私は言った。私は本当に良かったと思ったので、心からそう言った。

「ハギさんにはつきり言われたことがさー、すげーオレの胸に響いたんだよ。ズーンって。それで、ああオレちゃんとしなきゃと思

って」

「・・・はつきり言われた？なんか私そんな重要なこと言ったわけ？」

「えー、もう忘れたの？オレが言った言葉そっくりそのまま返してくれたじゃん」

私は少し苦笑いした。そんなふういきちんと伝わっているとは思っていなかったのだ。私はただ、思ったことをそのまま言っただけだった。どちらかというつぶしついで不慮な、ストレートすぎる言葉だったようにも思えた。友達に対して、そんなふう直球を投げるということを、私は普段あまりしたことがなかった。

しかし彼は落ち込むでもなく受け止めて、ちゃんと吸収したようだ。彼はいつものふざけた調子だったが、でも私は彼が見た目ほどふざけていないことを知っていた。彼は実は、いたって真面目にそう言っているのだ。真面目すぎて、ちよつと的外すだけだ。正論過ぎて、理解されないだけだ。不器用な人、と私は思った。

「よかったねえ」

私は心からそう言い、あのと電話で自分が言った言葉と、そのときキタガワに対して感じた苛立ちをふいに思い出して、ふふふ、と笑った。

「ハギさんのおかげで、別れたらずいぶんすっきりしたよ」

とキタガワはせいせいしたように言った。私は少し恥ずかしくなつて、話を変えようと思った。

「ところで、電話くれたことなんか今までなかったのに、なんで私に？」

「ん？他にいなかったんだよ。そんな話ができる女性って、ハギさんくらいしかないんだ」

そういうと、彼は半分くらい残っていたビールを飲み干した。それから、店員を呼んで、おかわり、と言った。2杯目、と私は思った。

キタガワにとって、私は相談相手としてそれなりに重要な存在であるらしい。それは純粹に嬉しいし、信用されているという安心感がある。信頼すなわち安心感。素晴らしい。それこそ私が求めていた、友達と呼べる関係じゃないだろうか？それは、男とか女とか、そういうのとは違う次元の話だ。

そういえばそういう友達って、あんまりいないな、と私は思った。男友達というのは、バランスの良い距離をとるのがとても難しいのだ。

しかしその日私はなんとなく、自分のことについてはあまりキタガワには話さなかった。牛角の日以降、私と英一の関係が相変わらずであることはなんとなく伝わっていただろうが、彼はあまり聞くとはしなかったし、もともと自分が話したいことが話せればいいタイプなのだ。私は、自分が話さなければ彼が聞いてこないことを知っていた。

「あ」

ふと私は思い出して聞いてみた。

「そういえば、ライブ行けなくてごめんね。チケット、無駄にした？」

「いや、フットサルのメンバの1人と行ったから大丈夫」

「そっか。すごい急だったからさ」

「実は八ギさん以外にも3、4人に声かけてたんだー。そんだけいれば、1人くらい捕まるかと思って」

キタガワは無邪気にそう言い、私は、「そうだね」と言って微笑んだ。一瞬だいちちゃんのことを頭をよぎって、この人はだいちちゃんとは違う、と私は思った。

おおよそ食事も終わり、どうでもいい話ばかりしていたころ、キタガワが突然、あ、と言って思いついたようにカバンの中を漁り、これ、と言って正方形の紙袋を取り出した。

紙袋には、約束したアジカンのファーストアルバムが入っていた。「インディーズ？」と私が聞くと、「ちゃんとメジャーデビューしてるよ」と彼は答えた。確かに裏を返してみると、有名なレーベル名が印字されていた。

「ボーカルが高校の同級なんだー」

「へえー、そりゃすごいね」

「それ聞いたときびっくりしたよ。だってアイツ野球部だったから」
ははは、と私は笑った。じゃあ大学に入ってから音楽始めたんじゃないの、と適当なことを言い、CDをカバンにしまった。あんまり期待していなかったが、英一の影響で聴いていた流行りのJ・P・O Pにも、そろそろ聞き飽きていた頃だったので、それも悪くないと思った。

その日も23時には自宅に戻り、さっそくCDを聴いた。1曲目から、重たいギターの音がスピーカーを鳴らした。スピッツやくるりが好きな私にとってはかなり好きなタイプの音楽だった。

「ふーん」

私はベッドに座って壁によりかかった。キタガワはいつもこんな曲を聴いてるのか、と私は思った。

4曲目に軽快なアップテンポの明るい曲が流れて、これはイイと思った。キタガワが好きなのは何曲目だろう、とふと気になったので、私はメールしてみた。いつものようにすぐに返事が返ってきて、そこには、2曲目と5曲目、と書いてあった。

ふと、そういえば彼についてほとんど何も知らない自分に気がついた。なんだかんだいってもう三年も前から彼の存在を知っているのに、彼が好きな音楽も、好きな食べ物も、どんな仕事をしているのかさえ、私は知らなかった。もっとも、仕事に関して言えば同じ会社である以上、自分とそう変わらないことをしているはずだったので、特にあえて聞きたいとも思わなかった。ただ、彼の恋愛事情に関して必要以上に事細かに知っていたのに、それ以外の部分で彼が普段どんな生活をしているのか、私はほとんど知らなかった。私はそれが、なんだかとても不思議なことのように思い、いつか聞いてみようと思った。

それから、そうだ、MDにダビングしたらCDは返さないといけないから、近日中にまた会える、と思いついて、私は少し嬉しくなった。でも、嬉しくなった自分に気づいて、私は少し戸惑った。確かにこここのところ、キタガワの顔を見る機会がやたらと増えていた。キタガワの同級生という若い男性ボーカルが、スピーカーの中で歌い続けている。若い、と言っても私よりも3つは年上のはずだ。

英一のことを考えて、また憂鬱になった。キタガワや同期の友達と話しているときのようには、英一と会っているときも楽しかったらよかったのに、と私は思った。どうして楽しくなくなってしまったのか、あるいは最初から楽しくなかったのかも良くわからなかった。

ただ、もし、キタガワやそのほかの誰かに対して自分が恋をしたとしても、そしてその恋が万が一うまくいってしまったとしても、きつと1年も付き合えば、今の英一との関係のようになるんじゃないかと思うと、私はもう、また新しい恋という気分にもなれなかった。誰と付き合っても結局は同じなんだろう、と思った。

スピーカーは耳慣れない音楽を鳴らし続けた。ベッドの上に座り込んで、ぼんやりと聴いていた。ふと思いついて、ケースから歌詞カードを取り出し黙読した。パワーのある音とは対照的な、繊細とも稚拙とも言える言葉が綴られていた。そのアンバランスさに居心地が悪くなり、私は途中で読むのをやめた。

プレゼント

誕生日を二日後に控えた水曜日、私はまた本社1階のロビーに向かっていた。すでにキタガワは待ち合わせ場所において、吹き抜けになっっている壁面に寄りかかり腕を組んで片足で立っていた。

彼はいつも薄いグレーのストライプのスーツを着ていて、さらに髪の色を茶色く染めているのもあいつて、そのスタイルは決して真面目そうなサラリーマンには見えなかったが、不思議と彼によく似合っていた。だいたいエンジニアを集めた会社なので、私服でもさほど問題にならないのだ。開発系の部署なら、よっぽどおかしな格好でなければ、とがめられるということもそうそうない。

私はわざと彼に気づかないふりをして彼の目の前を通り過ぎてみせた。おいおいおい、とふざけた調子で彼が追いかけてきたので、私は振り返ってにやりと笑った。キタガワも笑った。

「今日はどうしたの？」

私から誘うのはもしかしたら初めてのこともかもしれない。しかしキタガワはそんなことには気づいていないんじゃないかと私は思っていたが、そうでもないらしい。

「CDを返そうと思って」

私になるべくなんでもないことのようにそう言っと、彼は、いつでもよかったのに、と少し大げさなアクションで言った。それからいつものようにすたすたと前を歩き始めたので、私はキタガワの少し後ろについて歩いた。5分ほど歩いて、1軒の居酒屋に入る。

その店は私もキタガワも気に入っていたので、過去に何度か来た

事があつた。2人とともに、その焼き鳥屋のレバーが好きで、いつものようにまず飲み物とレバーを頼んだ。鶏レバーは炭火でさつとあぶつた程度に火を通しただけで、ほとんど生に近いのだが、レバーが苦手な人も食べられるほど食べやすかつた。

私たちは乾杯をし、すぐに運ばれてきた鶏レバーを口にした。私は、やっぱり旨いよね、と言い、うんうん、とうなずきながらキタガワも串にかぶりついている。レバーはいつものようにやわらかく肉厚だつたが、お腹がすいていたからか、いつもよりも少しだけ、さらに美味しく感じた。

次の注文をしたあと、私がカバンからCDを取り出すと、彼はさつそく、どうだつた？と感想を聞いた。私はそのころすっかりアジカンにハマつてしまつていて、毎日のように聴いていたのだ。正直にそれを伝えると、彼はさも嬉しそうに、あははははと笑つた。

「オレも今そのアルバムはヘビーローテーションだね。2曲目、いいでしょ」

「私は4曲目がいいと思つたな」

「4曲目？なんてタイトルだつて」

「えつ、毎日聴いてるのにタイトル知らないの？」

「そんなのいちいち覚ええないよ」

「えええええ」

彼はいつも、大きく口を開けて心のそこから楽しそうに笑つた。

顔も性格も、彼は決して私の好みのタイプではなかつたが、笑うと可愛いのに、と私はつられて笑いながら思つた。この人を好きになるということはありえるだろうか？とふと思いついたが、私はすぐにその考えを否定した。もう知り合つて4年目になるのに、何をいまさら、という気がしたのだ。しかし実は自分も相当嬉しそうな顔をしていることには気づいていた。私はなんとなくキタガワから目をそらしつつむいた。

どうかしている。確かにその日、キタガワがいつもと少し違う感じがしたのだ。でも、悪くない、と私は思った。キタガワとこんなふうに楽しいのも、悪くない。でも、いつからこんなに楽しくなっただらう。もしかして、いつもと違うのはキタガワではなくて、私自身なのかもしれない。どちらにしろ、彼がそれに気づいてないと思った。

私たちはいつものようにとりとめのない話ばかりして、笑いあった。

「そういえば、付き合っていないけど別れた女の子とは、その後どうしたの？」

「どうしたって？特に連絡は来てないよ。来ても無視だけど」

「そっか。諦めたんだね。」

「あ、そういえば別れ話をした次の日にメールが来たな。パソコンの方に。すげー長いヤツが」

「へえ。今までありがとう、みたいな？」

「いや、そんなキレイな内容じゃなかったな。オレ、優しい言葉とか言えないから、別れ際にたぶんけっこうキツイこと言ったんだと思う。興味があるなら読む？送るよ」

「いやいや、いいよ。そんなの読めないし読みたくもないよ」

「そのメールの最後の方にさ、もしかまた会いたくなったら連絡して、みたいなを書いてあったけどさ、ありえないね。二度と連絡するかっての」

キタガワの、正直すぎる言葉に私は苦笑いするしかなかったが、しかしこの人はどうしてこんなに生々しい感情を私にぶつけるのだろう、と私は少し前から不思議に思っていた。

確かに男友達ばかりの中で生きてきた私は、男性の本音や本性の部分を否応なく見せられる機会が多く、世間的に善しとされるフェミニズムのようなものは、実はあくまで建前でしかないというのを

本能的に知っていた。しかしキタガワは、私をまったく女性として見ていないようにさえ感じていた。それは私という人間性によるものか、それともキタガワがもともとそういう男なのか。私はいまだに量りかねていた。

その日、もう終演の時間になったころ、彼は突然カバンの中からキレイにラッピングされた紙袋を取り出し、私の目の前に置いた。私はそれが何なのかまったくわからずに、また何か貸してくれるのかと首をかしげた。

「これは何？」

「誕生日プレゼントだよ」

キタガワは少し照れたようにそう答えた。私が驚いて顔を上げると、今度はにやりと笑った。

「えっ？なんで？」

そういえばもうすぐ誕生日だった、と私は思い出した。でもなんでキタガワが自分の誕生日を知っているのだろう。私はさっぱりわけがわからなかった。

「私、もうすぐ誕生日なんて言ったっけ」

「この前言ってたじゃん！忘れたの？てっきり何か期待されてるんだと思ってたよ」

「えっ、マジで言ったの私？うわーごめん、ぜんぜん覚えてない」

言われてみればそんな話もしたような気がする。しかし私はそれまで、恋人以外の男性からプレゼントをもらったことがなかった。男友達が誕生日にプレゼントをくれるなんてありえないと思ってい

たから、たぶんその話をしたときも本当に期待していなかっただろう。思春期時代を男友達の中で過ごした私にとっては、友達同士のプレゼント交換なんて、テレビの中の世界だ。そのくらい非現実だった。だいたい、男友達同士でプレゼントをやり取りするなんて聞いたこともない。

袋を開けながら、私はすごくときどきした。今自分に何が起こっているのかもわからなくなりそうだ。キタガワは私にとって後輩であり友人だ。にもかかわらず、私とキタガワの間にいったいどんな化学反応が起こって、このプレゼントが発生したというんだろう。その紙包みの中からは、とても小さなバッグが出てきた。

「いや、ホントは期待されたからって言うわけじゃなくてね、この前のお礼なんだ」

キタガワがそう言ったのが、遠くの方で聞こえた。私は自分が何か彼にお礼を言われるようなことをしたつもりがなかったので、何のお礼なのかわからない。とりあえず受け取るべきなのだろうか？と私はその小さなバッグを見つめながら、ぼんやりとしていた。冷静に何かを考えようとしているのだが、何を考えてよいのかもわからない。ただびっくりして、嬉しいと言えば嬉しいのだが、どうしているのかわからなかった。お返しをしようにも、キタガワの誕生日はまだ当分先だ。とにかく何か言わなければ。

ラッピングを丁寧にあけると、かわいらしいポーチのようなバッグが出てきた。

「・・・かわいいねコレ」

正直な感想を言うと、キタガワは、でしょー、と言って大げさに喜んだ。その小さなポシェットサイズのPUMAのバッグは、それほど高価なものではなさそうだった。そう、ちょうど女友達とのプ

プレゼント交換にはちょうど良いくらいのサイズ。かといってやっぱりなんとも思っていない女友達に、男性が誕生日プレゼントをあげたりするものなのだろうか、と少し冷静になって、しばし私は考えをめぐらせた。そんな男は過去に会ったことがなかった。いや、そういうえば一度だけ、女の子みたいなしゃべり方で、実際に女友達がたくさんいるというヤツから、誕生日にちよつとしたものをもらったことがある気もする。しかしある意味で女性より女性らしかったその男と、キタガワという男は似ても似つかない。

「で、お礼つてなんの？」

しばらくそのプレゼントを見つめた後、私は聞いた。

「今日仕事で大井町に用があつてね」

キタガワは私の質問には答えなかった。私は黙ってその先を待った。

「大井町に行つて来たんだけど、大井町の駅ビルの中にスポーツ用品店があつてね、その女性の店員さんにね、尊敬する女性の先輩に何かプレゼントをしたいんだけど、何がいいですかね、って聞いたんだ。でもその先輩は彼氏がいるので迷惑にならないようなものがいいです、って言つてね。そしたらそばにそれがあつたんだよ。それでね、これだったら迷惑にならないですか、ってその店員さんに聞いたら、良いと思いますよって言つてくれたからそれにしたんだけど、そんなに高いものでもないからね、気にしないでいいよ」

と、結局彼は私の質問には答えずに、そのプレゼントを購入したいきさつを嬉々として語った。その様子があまりに無邪気だったので、私は、彼が何か見返りを期待しているわけではないことを察し

た。それから、彼の中でも私はちゃんと先輩であり友人ということになっているらしい。私はだいたいぶほつとした。それから、また少しがっかりしている自分に戸惑った。お礼と言っているのはこの前の電話のことだろうか。

「ハギさんがいなかったら、オレ、あのままズルズルしてたと思うから」

私はようやく、心底嬉しくなった。私はお礼を言われるほどのことをしたのだ。そのプレゼントは、本当の意味での「プレゼント」だった。

「気を使ってもらって返って悪かったねえ」

「いいよいよ、ホントに感謝してるんだ。海老で鯛を釣るうなんて思っていないから大丈夫」

彼はおどけてみせたが、私はなるべく心から「ありがとう」と言つて、それをカバンにしまった。

帰りの電車の中、おもむろにカバンのチャックを開け、私はその存在を確認するように中に入っている小さなバッグを見つめた。お財布と携帯を入れたらいっぱいになりそうな、本当に小さなバッグだった。それは私のカバンの中に、こじんまりと含まれていた。私はまた嬉しくなってしまうていたが、にやつかないようにわざわざ眉間にしわを寄せてチャックを閉めた。

このプレゼントを英一が見たらどう思うだろうか。でも、カバンの中に小さなカバンが入っていたとして、真つ先にそれを誰かからのプレゼントだと思う人はそれほど多くないだろう。私は、ラッピングの紙袋をなるべく小さくたたみ、その小さなPUMAが入っている場所とは別なポケットにわざわざ入れた。

確かにアクセサリーなどの身に着けるものならまだしも、一見ポシエットのようなバッグだったから、自分で買ったといえればそれで済むことだった。そのとき確かに私は、お昼休みに財布を入れて持ち歩けるほどの小さなカバンが欲しいと思っていたのだ。

ふと、なんで隠さなければいけないんだろうな、と私はまた憂鬱になった。英一に言わせれば、男が女にプレゼントをする理由は一つだった。私はそれをよく知っていた。もしかしたら、世間的には英一のように思っている男性の方がずっと多いのかもしれない。

でもこれはただの「お礼」だ。私はキタガワの少し照れたように笑った顔を思い出した。それは、今までどんな恋人にももらったプレゼントよりも、ずっと嬉しかったのだ。

各駅停車の東横線は、すでに菊名の駅を発車していた。窓の外には、閑静な住宅街の景色が流れていった。

誕生日当日、私は英一の部屋にいた。その日は金曜だったので、仕事が終わった足でそのまま直行したのだ。

私たちは関内駅で待ち合わせをして、近くのレストランで夕食を取った。英一はわざわざ前日にそのレストランを予約したらしかったが、フランス料理を食べさせるその店に入るとき、私は、今日あまりカジュアルすぎない格好をしてよかった、と思った。

フレンチフルコースは値段の分だけ美味しかったが、ワインの味はあまりよくわからないので、グラス一杯だけ頂いて、それでも少し千鳥足になりながら、私たちは店を出て英一の部屋に向かった。部屋に入ると浴槽に湯を張り、いっぱいになるのを待つ間、壁によりかかってぼんやりしていると、英一がキスをしてきた。私はされるがままになった。

夜、キタガワからメールが来ていた。お風呂から上がって、テーブルの上の携帯の着信ランプが新着メールの存在を知らせているの

に気づいた。シンプルに、『誕生日おめでとう』という内容のメールだった。着信から15分ほど経っていた。

私はなんとなくそのメールには返事をせずに、携帯を閉じて鞆に入れた。英一はその様子をなんとなく見ていたらしく、私のカバンの中に入っている、小さなPUMAのバッグを見つけた。

「それ、かわいいね。そんなの持ってたっけ」

英一が何気なくそう言っつて、私は一瞬どきつとしたが、

「ああこれ、後輩にもらったの」

と、なるべくなんでもないことのように、そう言っつた。もらったのは、嘘じゃない。でもそれは大したことじゃないのだ。これはあくまで「お礼」であり、英一が心配するような「何か」はそこに存在し得ないのだ。ただ、それを英一が納得するように説明するのは、並大抵の努力じゃ済まされなだらう、と私は瞬時に判断した。それは価値観を変えるに等しい作業だ。その努力を費やすだけのモチベーションは、私にはもうない。

英一の顔色が曇った。

「後輩つて、男？」

とつさに私は少し笑っつて、女の子だよ、と言っつた。英一に嘘をつくのなんて、もうすっかり慣れっつた。そうか、と言っつて恥ずかしそうに英一が笑っつた。

次の日、私と英一は久しぶりにデートをした。

英一はあまり外出するのが好きではなかつつたので、付き合い始め

のころからずっと、あまりデートらしいデートをしたことがなかった。カラオケに行くとか、買い物に行くとかいうことはたまにはあったが、それらもほとんどを自宅のそばで済ませた。一度だけ、一泊二日の旅行をしたことがあったが、それはあまり楽しい思い出はなかった。私はふとしたことで機嫌の悪くなる英一に気を使い、非日常を楽しむ、というリラックスした気分にはなれなかった。どうしたらその旅行を楽しむことができたのか、実はいまだにわからないのだ。

その日私たちは、普通の同世代のカップルがするように、買い物をしたり食事をしたりした。英一が優しかったので、私は自分が愛されていて、とても幸せな存在だと勘違いできる気さえした。小春日和の中、穏やかな時間が流れていた。

週末の間、私はキタガワから来たメールに対して、返事をするのをすっかり忘れてしまっていた。本当は英一が見ていないときにも、こっそり返事をしようと思っていたのだが、私は後で返そうと思ったメールはたいがい忘れる性格だ。そのうえ、その日はいつもよりも少し特別な日で、自分の身に起こったいろんなことを、全て忘れることができるような気さえしていた。

週末の横浜駅は相変わらず人が多く、どこに行っても人の気配がなくなることはなかった。私たちは、他のカップルがそうするように、ずっと手をつないで歩いていた。西口に出て空を見上げると、今にも雨が降りそうな曇り空だった。

翌週、私はキタガワに誘われて、また1階のロビーに立っていた。このところ毎週のように飲みに行っていたので、多少出費はかさんでいたが、それでも誘われると断れずに、むしろ嬉々として誘いのった。

その日キタガワは、誕生日にメールをしたのに返事が来なかった
ので淋しかった、と私に言った。彼はいつものふざけた調子だった
が、そのセリフがあまり彼らしくないような気がして、私は少し心
が痛んだ。それで、英一の部屋にいたことを正直に明かした。

「そうだろうと思ったよ」

と彼は言った。私はなぜかとても申し訳ない気持ちになった。キタ
ガワには偉そうに説教じみたことを言った自分が、結局キタガワと
そう変わらないことをしているということについて、恥ずかしいよ
うな後ろめたいような、嫌な気持ちにもなった。

「それで、ハギさんは彼とずっと付き合っていくの？」

めずらしくキタガワが私に聞いた。私は、その質問にどう答えて
良いかかわらずに、うーん、とうなった。

「ちゃんと別れてあげないと、彼がかわいそうだよ」

と、彼はいつになく真剣にそう言った。私はとっさに言い訳をしよ
うとしたが、うまく言葉が出てこなかった。“時期”が来るまでは、
とも思っていたが、じゃあその“時期”はいつなんだと聞かれると
よくわからなかった。私はただ、そうなんだけど、と言葉を濁した。
何を言っても言い訳にしか聞こえないだろう、という気がした。

「好きかって聞かれると、よくわからないんだけど」

もう潮時なのかもしれない、と私は唐突に思った。少なくとも、
私は英一を求めている。ただ、それだけのことだ。そんな簡単な
ことを、どうして今まで認めようとしなかったのだろうか。

「オレは別れたよ。だってハギさんが教えてくれたから」

キタガワがそう言った。私はやっと、自分の心を見つけた気がした。少しすつきりした気分になって、「そうだね」と心から言った。そうでしょ、といつももの調子でキタガワが言っ、ははは、と私は笑った。本当に可笑しくなって、お腹の底から笑っていると、キタガワはそんな私を不思議そうに見つめた。

ゲームオーバー

週末、私はいつものように英一がテレビゲームをする画面を、英一の隣でぼんやりと眺めていた。いつ言おうか、私は一人悩んでいたのだ。

単純に思ったまま伝えれば良かったのに、英一がどんな反応をするのかということばかり気になって、いったいどんなふうに切り出せばいいのか、私はさっぱりわからなくなっていった。英一はいつものように、このゲーム終わったら夕飯の買い物に行こう、と言った。そして、何食べるか、と言って笑った。何がいいかな、などと言いながら、私たちは財布だけ持って近所のスーパーに出かけた。

そして、結局今までどおりの週末を過ごした私は、日曜の夜に自宅に帰ってきた。自宅に帰ってくると、私は自己嫌悪でいっぱいになって、ベッドの上でごろんと横になった。来週も再来週も、また英一の部屋で過ごすのだろう。そのままうとうとと眠ってしまいそうになったので、私はシャワーを浴びようとユニットバスに向かう。繰り返すことは、いつだって簡単でラクなのだ。油断すると、私はすぐに流される。

そして月曜日の夜、意を決して、私は一人携帯電話の液晶画面を見つめていた。この通話ボタンを押せば、すぐに英一につながる。ディスプレイには、英一の番号が表示されていた。仕事から帰ってきて、まだそんなに時間も経ってないが、英一ももう自宅に戻っているはずだった。

用意したたくさん言葉たちが、頭の中をぐるぐると回った。電話、という手段は卑怯かもしれない、と私は思った。でも、週末ずっと一緒にいたのに、私は結局何も言えないままだったのだ。目の

前で笑っている英一に別れ話をしたときのことを、私は何度も想像した。頭の中で、何度もシミュレーションをした。想像の中で、英一は、怒ったときの睨むような強い視線を私に向けた。その目を正面に見据えて、私は自分の思ったとおりの言葉を話せる自信がなかった。

ただ、この電話だけで話が済むとは思えなかった。しかしそれなら何度でも話をすればいい、と思った。どうせ今まで無駄な時間を過ごしてきたのだから、急いで別れなければいけないということもなかった。

通話ボタンを押すと、2回のコールですぐに英一は出た。いつもの甘えた声に、私はさっそくひるんで、用意していた言葉を飲み込んだ。

「あの、、、」

「どうした？何かあった？」

英一は、普段は夜遅い時間にしか電話をしないはずの私が、割と早い時間にかけてきたということが意外だったようだ。

「えっと」

私は、とにかく何か言わなければ、と思った。その日、以前別れ話をしたときのように、高ぶる感情に任せて勢いで別れ話をするのは違った。私はある意味でとても冷静だった。その冷静な頭で、私たちが別れなければいけないということを、その理由を、うまく説明してくれる言葉を、必死に探していた。しかし考えれば考えるほど、何も伝わらないような気がするのだった。

私は観念して、ただ別れたいと言った。最初、英一は私が少し悲観的になってそう言っているだけだと思ったようだ。私が一時的に少し情緒的になって、ヒステリーを起こしているだけだろうという

判断だ。つまり彼は、とりあえずなくさめるといった方法をとった。

「そんなこと言うなよ」

と英一は悲しげな声を出してみせて、それでも私が黙っていると、別れたくない、と言った。

「大丈夫だから。何も問題ない」

と彼は言い、私は、何が大丈夫なんだろう、と思った。彼は、週末はまた来るんだろ？と話を変えようとした。私は少し彼に同情した。

「もう、会わない。会いに行かないよ」

私は、静かにそう言った。それで彼は、ようやくコトが飲み込めたようだった。私は泣いていなかったし、勤めて冷静にそう言ったのだ。彼は、怒ったように、嫌だ、と言い、それきり黙ってしまった。

私は、ゆっくりとたしなめるように説明した。ずっと別れようと思っていたこと。よりを戻したように見えても、私の気持ちはとくに英一から離れていたこと。そして、英一の気持ちが一番にないということ、とうにわかっていたということ。

英一は最初は何か相槌を打っていたが、そのうち黙ってしまった。ひととおり話し終わって私が黙っていると、突然電話が切れた。私は、ああやっぱり、と思って、こらえていた涙をぬぐった。彼は逃げてしまったのだ。たぶん、彼は私を二度と許さないだろう。私はその日、もう一度彼に電話をする気にはなれなかった。

涙はあとからあとから流れて、仰向けでベッドに倒れこんだ私の

こめかみを濡らした。嗚咽は出ずに、ただ涙を流していた。

10分もそうしていただろうか。今日、英一から折り返しの電話が来ることはないだろう、と私は思った。ティッシュを一枚取ろうと体を起こして、ふと思いついて再度携帯電話を手を取った。電話帳の「友人」フォルダから彼の番号を探し、通話ボタンを押した。

しかし彼はなかなか出なかった。ぷるる、という電子音はいつまで待ってもやまずに、あきらめかけて切ろうとしたとき、ようやく、はい、と言うキタガワの声が聞こえた。私は、なるべく涙声にならないように、平静を装って、今電話して大丈夫かと聞いた。

「ごめん、あとでかけなおす」

彼がそれだけ言っつて、電話は切れた。私は携帯を放り投げると、またベッドに倒れこんだ。それから、長いため息を一つついた。

英一に、自分の気持ちをうまく伝えられなかったことをキタガワに話せば、彼は呆れた顔をするだろうか。私は、キタガワに電話したことを少しだけ後悔し、また、すぐに電話が切れて良かった、と思った。そもそも、メールや電話の回数が増えたからと言っつて、私とキタガワの心の距離がどのくらい近づいたと言えるのだろうか。私はいつたいなぜキタガワに電話なんかしたんだろう。

そのとき私は、自分にとつてキタガワという人が、友人の域を越えてかなり重要な存在になっていることに、うすうす気付いていた。それでも、自分にとつて大きな存在であると同時に、キタガワにとつての自分がどんな存在なのか、私にはさっぱりわからなかった。ただ、どちらにしても今は、とにかく英一ときちんと話をしなければ、何も前に進まないのだ。

いったん止めていた涙がまた出てきて、私は自分がキタガワに慰めてもらおうとしていたことに気づいた。それはとても恥ずかしいことだと思い、さらにみじめな気持ちになった。

そのとき、聞き慣れた着信メロディが、部屋の隅のほうに転がっていた携帯電話から聴こえてきた。その音は、私が電話に出なくとも、英一からであることを知らせていた。突然切れた電話に私がかげ直さなかつたので、英一の方で業を煮やしたに違いない、と私は思った。

「はい」

私はさつきよりも緊張し、通話ボタンを押すのを一瞬躊躇した。

私の言葉に、英一が何を感じ、どんな言葉にして私に返すのか、まったく想像がつかなかった。しかし床に座りなおすと、観念してその電話を取った。ちょうど斜め前にあつた全身を写す鏡に、体を硬くして座っている自分の姿が写った。鏡に映った女は、ひどい顔をしている。

「もしもし」

英一は、いつもよりも少し低い声で静かに言った。怒ったときの声だ、と私は思った。

「少し考えたんだけど」

「うん」

「週末、空いてるだろ？」

「・・・うん」

「こういうことは、会って話したほうがいいと思って」

英一が静かにそう言って、私の心臓はしめつけられたように苦しくなった。一瞬、予定があるとさえ言えば良かった、とさえ考えた。逃げ出したいのは、むしろ私の方だ。

「そう・・・だね」

「電話だけで、はいサヨナラ、とかオレ嫌だから」

「・・・うん」

本当は、できれば会いたくない、と私は思った。それは、ただ怖かったのだろう。私は一刻も早くこの電話を切りたい、と思った。英一の低い声が、何よりの恐怖だった。英一はあきらかに私を非難している。

私たちは、土曜日の夕方に関内で会う約束をして、電話を切った。

私は、会って何を話さなければいけないのかもわからなかった。

電話で自分が話したこと以上の言葉を、英一に伝えられる自信がなかった。私はすっかり逃げ出したい気持ちになっていたが、しかし私が行かなければ、英一はいつでもこの家に来ることができのど。どちらにしても、一度も会って話をせずに「はいサヨナラ」というわけには行かないだろう。英一がそれを望まない限りは。

私はもうすっかり力が抜けて、放心したように床に座り込んでいた。

それから一時間近くたって、また携帯の着信音が鳴った。今度はキタガワからだった。

「ごめん、髪染めてたんだ」

電話に出るなり、彼はまったく悪びれずにそう言った。私は、なんてタイミングの悪い、と言いつうになった。あまりの間の悪さに、すっかり涙が止まっていた。

「で、なんかあったの？」

「えつと・・・いや、さつきね。英一と電話で別れ話したの」
「ああ、それでちよつと涙声だったんだ」

彼は妙に納得したように言った。バレてたんだと思って、私は少し恥ずかしくなった。

「でも話の途中で切られちゃったんだ」
「会って言わないとダメだと思うよ」

彼は当然のように言った。

「うん、いったん切られたんだけど、またかかってきて週末に会うことになったよ」

「そう、それはよかったね」

私はすっかりほっとしていた。ついさっきまであんなに恐怖していたのに、今ならきちんと会って話すことができるような気さえした。

「ハギさんの声が泣いてたみたいだったからさあ、なんで泣いてんのかなあ、オレ何かしたかなあ、って髪染めながら一生懸命考えただけで、ぜんぜんわかんなくてさー」

別れ話をした、と私が言ったばかりなのに、彼はまったくノー天気にもそう言って、私はついさっきまでのシリアスな英一との会話を思い出した。同時に、風呂場で髪を染めているキタガワを想像して、その二つのかけ離れた出来事が異なる場所でもまったく同時刻に行われていたという事実が、妙に可笑しくなった。私が、英一にうまく伝えられずに悩んでいる間も、英一の怒った様子に恐怖している間も、彼は暢気に自分の髪の色染まり具合について、試行錯誤して

いたのに違いないのだ。彼の短く刈り込んだ茶色の頭は、そうやって作られていたのだ。

私が笑い出すと、つられたのかキタガワも笑っていた。自分が何ヶ月もかけて悩んでいたことは、実はすごくすごくちっぽけだった、と私は思った。私は、自分で思っているよりもずっと、ちっぽけな取るに足らない人間だったのだ。私はすっかり楽しくなって、金髪になったキタガワの短い髪を想像した。

私は、英一にちゃんと話をしよう、と思った。ちゃんと会って話をしなければいけない。私は、本当はそれを望んでいるのだ。もう怖がったり、逃げたりしてはいけない。

「髪染めてる間にね、オレずっと八ギさんのこと考えてたよ」

キタガワは、ごく自然にそう言った。へっ？と私がおかしな声を出す、

「最近よく八ギさんのこと考えるんだ」

とさらに彼はさっぱりとそう言い、私はすっかり言葉を失った。

土曜日の京浜東北線の中で、私はキタガワにメールをした。19時に英一の部屋に着くことになっていた。夕方の社内はそこそこ込んでいて、私はドアの脇に寄りかかって、窓の外の夕焼けを眺めていた。もうまもなくあたりは夕闇に包まれるだろう。キタガワから『気をつけてね』という内容の返事が来た。

もしかしたら殴られるかもしれないし、刺されるかもしれないよ、と彼は昨日電話でそう言った。まさか、と私は言ったが、もちろん、100%ありえない、と言い切れるわけではない。でも、ちゃんと

話せばわかってくれるはずだと思った。キタガワにとって英一は見知らぬ男だが、私にとっては曲がりなりにも1年と数ヶ月を共に過ごした人なのだ。怖くても、正直に伝えなければいけないと思った。そうでなければ、英一も私も終われない。

南口の改札を出ると、西の方に向かって通い慣れた道を歩いた。この道を歩くのも最後だ、と思うと感慨深かった。ゆっくりと足を運び、五分も歩くと、最終決戦の舞台はもう目の前だ。

英一との話は、思ったよりもスムーズに終わった。

電話での私の言葉を、彼はきちんと受け止めてくれたようだった。本当のことを言えば、私はもっと、罵ったり蔑んだり、彼が怒りに任せてひどい言葉を発するのではないか、と思っていた。元彼との別れ話のときのように。その延長で、殴るとか刺すとかいうこともありえないことはないと思っていた。しかしそういう言葉は一つもなく、彼はいたって紳士的に、私たちの今の関係が、もう今日で終わるものとして、部屋に少し残っていた荷物や、今後の二人の関係について話した。結局私は、最後まで彼のことをあまり理解できていなかったんだな、と思った。

あるいはもしかしたら、彼自身、もう二人の関係が元に戻ることはないということ、なんとなく感じ取っていたのかもしれない。理解し合えないなりに、なるべく優しくしようと努めていた彼の、それまでの行動を思い出して、私は少し切なくなったが、部屋に残っていた少しの荷物をまとめると、後は捨てて、と言い、さっさと玄関に向かった。

扉を開けて振り向くと、英一はまだ何か言いたそうにしていたが、

「じゃあ、元気で」

と私が言うつと、

「ああ、がんばれよ」

と無理に作ったような笑顔で言った。かっこつけたのか、あるいは
気を使ったのか、やっぱり量りかねたが、とりあえず手を振って扉
を閉めた。

私はエレベーターで1階に降りると、1時間前に歩いてきた道を、
また駅に向かって歩き出した。途中で私は振り返ると、マンション
の最上階の窓を見上げた。彼が住んでいた11階の窓から、この道
がよく見えることを私は知っていた。彼の部屋の窓は、カーテンが
閉まったままだった。何秒かそうして見上げていたが、意味もなく
笑って、私はまた歩き出した。もう涙は出なかった。

もう二度とこの道を歩くこともないだろう。

デート

横浜駅のみなとみらい線の入り口の前で、私は一人おろおろと彼を探した。約束の時間はとうに過ぎていて、横浜駅に着いたという連絡があつてから、もう5分以上が経過していた。

みなとみらい線の開通に伴つて、横浜駅はその年の2月に改修工事が終わったばかりだった。私はみなとみらい線の入り口が、今自分立っている中央通路にしかないと思つていたのだが、実は工事によつて新しく出来た北口と南口にも、みなとみらい線の入り口が存在していたらしい。私はそれをずいぶん後になつてから知つた。

「みなとみらい線の入り口でしょ？いないよー」

程なく電話がかかつてきて、出るなり彼はとぼけた声で言った。私は携帯電話を耳に当てたまま、人ごみの中央通路を行ったり来たりして、30メートルほど離れた二つの入り口をうろつろした。彼の姿はどこにも見当たらない。いったい彼はどこの「みなとみらい線の入り口」にいるんだろう。

「わかつた。階段を下りて、改札をくぐつたところまで来て」

私は諦めて、改札まで降りることにした。改札のあるフロアに降りれば、同じ場所にたどり着くはずだ。電話を持ったまま自分も階段を降り、改札の前まで来た。ここからなら、もし彼が向こう側の改札から入ってきたとしてもそれを見つけることができるだろう。

「改札の中に崎陽軒があるでしょ？」

幸いにも横浜駅構内では地下でも電波が届くようだ。

「崎陽軒？あー、あったあった」

私はようやく、改札の向こうから歩いてくる彼を見つけたことができた。同時に彼も私に気づいたようだった。私は慌てて持っていたパスネットを改札に通した。

「おはよう」

見慣れない格好をしたキタガワが朝の挨拶をした。私も、「おはよう」と言った。すでに約束の十時を15分ほど回っていた。

「で、船に乗るんじゃないの？」

彼がホームへと降りる階段に向かって歩きながらそう言った。私はあつ、と言って彼を見た。昨日の夜、電話をしながら二人で立てた計画は、しよっぱなから崩れている。

昨夜、英一との話が終わって、私は自宅に戻ってきてからキタガワに電話をかけた。帰る途中にメールや電話で連絡することもできたが、落ち着いて話が出たので、自宅に戻ってから電話することにしたのだ。

短い呼び出し音の後、すぐに電話はつながった。「もしもし」と私が言うと、「もしもし、大丈夫？」と彼は妙に切羽詰った声を出した。なかなか連絡が来ないから、もしかして刺されたのかと思っただよ、と彼は言って、このノーテンキな人でも心配したりするのか、と私はちよつと意外に思った。

それから、英一は逆上したりしなかったこと、最後は笑顔でサヨナラと言えたことなんかを話した。キタガワは、彼はオレが思っ

たよりもオトナだったんだね、と言って笑った。それから、久しぶりに日曜日が暇になったよ、と私が言うと、じゃあどこか出かけようか、とキタガワが言った。私はすっかり嬉しくなって、デートだね、とキタガワに言った。そうだね、とキタガワも言った。一瞬、別れ話をした次の日に違う男とデートをするのはどうなんだろう、とも思ったが、しかし私にとってはキタガワは大事な友人の1人であり、断る理由もなかった。というよりも、今キタガワに会いたいと思っっている自分の気持ちを抑える方がおかしいような気がした。

その電話で、私たちはみなとみらいに行くことにして、横浜駅で待ち合わせてシーバスに乗ろうという話をしたのだ。

「すっかり忘れてた」

私が正直に言うと、えー？と言って彼は笑った。

「船、乗りたかったなー」

「だってどこにいろかぜんぜんわからないんだもん」

私がそういうと、まーいいか、と彼は言った。その方がおもしろいね、と彼は言い、また笑った。ついさっきまで、キタガワと会えないかも、と自分が相当焦っていたことを思い出した私は、とても可笑しくなつてくすくす笑った。すると、いつも飲みに行くときのように少し前を歩いていたら彼が、突然振り向いて右手を差し出した。差し伸べられた手に、反射的に出した私の左手が触れると、彼はぐっとその手を引っ張り、

「はぐれると困るからね」

と、前を向いて歩き出しながら言った。私は少し、というよりだい

ぶ驚いて、すぐに手のひらに汗をかいた。私の手がとても湿っていることに気づいていただろうが、それでもキタガワは手を離さなかった。並んで歩くと、彼の背がいつもより少し高いことに気がついた。さりげなく足元を見ると、いつもスーツのときにはいている革靴ではなくて、かかとの高い年季の入ったこついブーツを履いていた。そのブーツはとも使い込まれていて、今日のためにわざわざ用意したというわけでもなさそうだった。確かにキタガワはあまり身長が高い方ではなかったが、それについて少しは気にしているんだろうか、と私は思った。

私たちがホームに到着すると同時に、音もなくすべりこむように紫色の車両が入ってきた。階段のそばの入り口で人ごみを避けながら、降りる人の列が途切れるのを待つと、私たちは新しい匂いのする車両に乗り込んだ。祭日のみなどみらい線は、横浜駅を過ぎても座れないほどに混雑していて、その大半がカップルや友人同士で遊びに来たと思われる若者だった。

それまで私たちは平日以外に会ったことがなかったので、私はその日初めてキタガワがスーツ以外の格好をしているのを見た。いつもとまったく雰囲気の違いと、いつもよりずっと近い彼との距離に、私は異常なほど緊張し、つないでいる手のひらがどんどん汗ばんでいく。

「元町・中華街駅で降りるの？」

ドアの上にある路線図を眺めながら彼は私に聞いた。キタガワはみなとみらい線には乗ったことがないと言った。そういえば電話でも、横浜にはほとんど行ったことがないと行っていた。英一が関内に住んでいたため、このあたりの地理は把握していたが、みなとみらい線の元町・中華街駅では降りたことがなかったので、中華街へまっすぐにたどり着けるかどうか、私はこっさり心配していた。

「きつと元町・中華街駅で降りる人はみんな中華街へ行くから、
ついていけばわかるよね」

彼はまたもノー天気になんて言つて、私はそのとき、彼がさうとう
楽天的な性格であることを思い知り、またも可笑しくなつて笑つた。

「それもそうだね」

彼はもう隣にいるのだから、計画が崩れようが、道に迷おうが、
それも含めてデートなのだ。

何事も計画的に進まないと怒り出す英一とだったらこうは行かな
いだろうな、と私はその日初めて英一のことを思い出した。それと
同時に、昨日別れ話をしたばかりだったのに、そんなことはもうす
っかり忘れて、私はキタガワと初めてのデートをとて楽しんでい
る自分に気づいた。罪悪感がないと言つたら嘘になつたが、そのと
き私は不思議とリラックスしていた。もう何年も、こんなに楽しい
気持ちで男性とデートをしていなかった、と思つた。

昨日、別れ話のときに英一は私に、他に好きな人ができたのか、
と聞いた。私は、違ふよ、と言つて、ずっと別れたいと思つていた
から、と言つた。キタガワのことは特に話さなかつた。キタガワに
対して自分がどう思っているのか、まだ量りかねていたので。好き
な人、とは少し違ふ気がした。恋だとか愛だとか、そういうのとは
違ふ次元にいる人だと思つた。ではどういう存在なのかと、それを
英一にわざわざ説明する義務も無いという気もした。キタガワは英
一とは違ふ次元にいて、だから英一に代わる人ではないのだ。

「それならよかった」

と英一は安堵したように言った。何が良かったんだろう、と私はぼんやり思った。二股とか、オレ許せないから、と英一は言い、知ってる、と私はあいまいに笑った。

考えごとをしながらキタガワについて歩いていたら、すでに中華街の正門をくぐっていたようだ。あたりはゴマ団子と肉まんの香りで満ちていた。お昼ご飯の時間まで、まだだいぶ時間があったので、私たちはのんびりその日ランチを食べる店を探すことにした。

彼は歩きながら、中華街には小さいころに来たことがある、と言った。横浜に住んでいる叔父に会いに来て、連れて行ってもらったそう。そういえば私も小さいころ、家族でたまに中華街に来たことがある、と言った。

「確かこのあたりに『東園』ってお店があつてね」

と私が言うと、彼は、嬉々としてその店を探そうと言った。その店はメイン通りに面しているので、すぐに見つけることができた。あった！と言って彼ははしゃいだ。

幼い頃のキタガワと、それよりもっと幼い3つ年下の私が、遠い昔に中華街ですれ違っていたとしたら、それはそれでドラマだなあ、と私は思った。ただ現実では、もし本当にすれ違っていたとしてもそれを確認する手段がないのだ。

適当に入った店で食事をして中華街を出ると、私たちは山下公園に向かった。どこも観光客らしき人群れでいっぱいだったが、私たちは特に気にせず歩いた。氷川丸の前で、観光客と思わしきおば

さんに声をかけ、写真を撮ってもらった。キタガワが知らない相手でも臆せずに話しかけたので、私は少し驚いて、案外頼もしいんだな、と思ったりした。

山下公園の中をのんびり歩いたり、ベンチに座って休んだりして公園を出ると、赤レンガ倉庫を通って、ランドマークタワーへ歩いた。そのときすでにけっこうな距離を歩いていたので、ブーツだった私は、足の痛みを我慢しながら歩いていた。でも、どんなに痛くても、まだこうして並んで歩いてたかったのだ。夕暮れにはまだ少し早い、展望台で休みつつ、あわよくば夕日が見ればいいと思っただ。

歩きながら私たちは、本当にくだらないうことばかり話した。すれ違ったカップルの女性のスカートが短すぎるとか、キタガワのいきつけの歯医者先生の素足に革靴を履くとか、うちの家族が全員、それぞれに通う会社や学校で「ハギ」と呼ばれていることとか。いつも飲み屋で話しているような、どうでもいいことばかりだ。

ずっと笑っていたので、足だけでなく腹筋も筋肉痛になりそうだと私は言った。キタガワは、オレはあごも筋肉痛になりそうだよと言っただ笑った。

ふと、もう目の前がランドマークタワーというところで、カバンの中の携帯電話が振動しているのに気づいた。休日の昼間に電話をかけてくるといえば、両親くらいのものであったが、取り出した携帯のディスプレイに表示された番号を見て、私は動けなくなった。そこには英一の名前と番号がでかかど表示されていた。

振動し続ける携帯電話を握り締めたまま、私はその場に立ち尽くした。昨日、何か言いたそうにしていた英一の顔を思い出し、何か言い残したんだろうか、と私は一瞬パニックに陥った。私が立ち止まったので、キタガワが、どうかした？と聞いた。

「英一から電話が・・・どうしよう」

私はおろおろしながらそう言って、鳴り続ける電話に出ようかどうかしようか、また、いったい何の用があるのかと考えた。不思議そうに私を見つめていたキタガワが、

「彼のためを思うなら、出ない方がいいと思うよ」

携帯の振動がようやく止まり、着信履歴を見ると、その少し前にも一度かかってきていた。そのとき私は気づかなかったのだ。2回もかけてくるのであれば、何か用事があるのかもしれない。

「何の用だろう・・・」

私はつぶやいて、途方に暮れた。かけなおすべきか、このまま無視してしまうか。忘れ物は、全て捨てていい、と言ったはずだった。今まで忘れたことに気づかないようなものだから、残っていたとしても大したものじゃない。それ以外に用があるとしたら、いったいなんだろう。

「大した用じゃないと思う」

キタガワは妙に確信した口調で、そう言った。

「ちょっと淋しくなったただけだと思うよ」

彼がなぜそんな風に言い切れるのかわからなかったが、もしそうなんだとしたら、かけ直す必要もない、と私は思った。実際もう話をする事なんか何もなかったし、話をしたところで私の気持ちも何も変わらないのだ。

よし、と言って携帯を閉じると、元のようにカバンに放り込み、ランドマークタワーの入り口へ向かって私はまた歩き出した。歩きながら、休日だというのに自宅で一人ゲームをする英一を想像して、少し胸が痛んだ。

ランドマークタワー展望台の西向きのベンチを占領し、私たちはもう一時間以上もそこで話していた。私たちの後ろをたくさんの人が通っていったが、ベンチは窓の方を向いていたので、人の視線はまったく気にならなかった。

私たちはずっと恋の話をしていた。いつも飲み屋で話しているよ
うな、ごくぶつちやけた話だ。なぜ彼と話しているのが楽しいのか、その理由が少しわかってきた気がした。彼と話しているときは、私は自分の気持ちにとっても正直になれた。多少かつこ悪いことも、あるいは人道に外れているようなことだとしても、キタガワには言うことができた。もしかしたらそれは、もともと彼が私にとってそれほど重要な存在じゃなかったとき、別に嫌われても良いと思っていたときに話した、さまざまな本音の上で培われた関係の成せるものなのかもしれない。だからつまり、たぶん彼もそうであるに違いないかった。

「昔付き合ってた子からね、無言電話がかかってきたことがあるんだよ」

私はびっくりして、どうして無言なのに犯人が本当に元彼女だったってわかったの？と聞いた。

「うん、他にその番号を知ってるのって親くらいだったし、親は無言電話なんかかけないでしょ」

「電話を取ると無言なの？」

「ううん、取るとすぐ切れる。それが毎日かかってきてさ」

半年付き合ったその彼女は、キタガワの方から別れを切り出したそう。彼は正直に彼女の嫌いなところやダメなところを全部吐き出して、それで別れたと言った。それにしたって、と私は思った。それにしたってそれじゃまるで復讐だ。実は元彼女じゃないんじゃないか、と私は思った。きつとタイミング的にも状況的にも、元彼女と考える方が自然なんだろう。彼女はキタガワにいったい何を伝えたかったんだろう？

「オレね、ずっと恋愛ってゲームだったんだよね」

キタガワはためらいなくそう言った。常識的な、一般的女性が聞いたら引いてしまうようなその言葉は、私の心に直接届いた。すぐ理解できる、と私は思って、何度も大きくうなづいた。

「どうやってエッチできるかっていうゲームなんだよ。だからオレ、半年以上女性と付き合ったことがないんだ」

私は、とっくにゲームオーバーになってた自分と英一の関係について思った。英一はよく、浮気も二股も許せないと私に言った。それはルール違反だと。それは私には、オレを傷つけるヤツは許さない、と彼が言っているように聞こえていた。

英一にとってもそれはゲームだっただろう。だから、ゲームのルールを守らないのは許せない、と彼は言ったのだ。

「ゲームだからさ、基準が勝ち負けなんだよね」

一年半もお互いを縛り付けていたのに、それはずっとゲームだった。私はずっと、自分が都合の良い女であることを認めたくなかつ

たし、それはきつと英一も同じだったのだろう。

私は、本当はもつと、不純なもので良いのかも知れない、と思っ
た。恋だの愛だのと、メディアや他人を通して創り上げてきた価値
観は、どうしたって生じる矛盾や消せない欲望を美化したがつた。
そもそも私の気持ちは私のものなのに、誰かが決めた枠の中にはめ
込もうとするからおかしくなるのだ。

この感情の浮き沈みに、筋を通したり、ルールを設けることのほ
うがずつと不自然なんだ、と私は思った。それはもつと自由で、こ
く個人的で、不可解なもので良かったのだ。

心の中がふわつと広がった気がして、私は泣きそうになった。改
めて、ずいぶん無駄な時間を過ごした、と思った。そして、その無
駄な時間を過ごして良かった、とも。

展望台の中は、観光客がひっきりなしに行ったりきたりしていた
が、人の声も足音も視線も、私はなぜかまったく気にならなかった。
ガラスの箱に2人きりで閉じ込められているかのようで、そこは今
までに感じたことがないくらいに居心地が良く、とても良い夢を見
ているみたいだと思った。そこは今まで出会った誰と一緒にいるよ
りも心地よい空間だった。

赤くなり始めた太陽が、少しずつ地平線にかかる分厚い雲に近づ
いていった。その真つ赤な球体が見えなくなってしまつまで、私た
ちはただ黙つてそれを見つめていた。それはゆっくりと時間をかけ
て雲に吸い込まれていった。球がすっかり見えなくなって、まばた
きをすると、夕日のオレンジ色の反対色である青い球体が、残像と
なつてまぶたの裏側に浮かんでいた。

「青いね」

キタガワが目を閉じてそう言ったので、私も目を閉じて、本当だ、とつぶやいた。目をつぶったまま、私の汗ばんだ右手を、キタガワがぎゅっと強く握った。私もキタガワの左手をぎゅっと握り返した。青い球体は、いつまでもいつまでもまぶたの裏側から消えなかった。手を伸ばして触ったら、冷たそうだな、と私は思った。

そのとき確かに私は何も考えていなかった。ゲームの世界から、すっかり現実に戻ってきたのだった。キタガワと私は、そのときから現実を生きているのだ。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4348b/>

ゲーム

2010年10月10日22時43分発行